

UMTP Modeling Forum2025 AI時代のシン・データモデリングとは？

AI readyデータ整備のためのデータモデリング

2025年11月26日 11:40-12:30
株式会社データアーキテクト
(<https://dataarch.net>)
真野 正
mano@dataarch.co.jp

講演者プロフィール

真野 正（まの ただし）

- ◆ 株式会社データアーキテクト 代表取締役
- ◆ ITコーディネータ、システムアナリスト、データベーススペシャリスト
- ◆ JDMC査読委員、DAMA日本支部会員、IT勉強宴会会員



■ 略歴

- 株式会社シーエーシーにて、製薬・飲料メーカー・航空会社・物流会社等の産業系のシステム設計・構築でDB設計・構築を中心に従事した後、情報資源管理（IRM）やデータモデリングコンサルティングに従事。（22年間勤務）
- 2005年に独立し、株式会社データアーキテクトにて、データマネジメント、データモデリング、DB設計を中心とした業務に従事。
- データモデリング関係：自動車関連部品・PLMシステム、メガバンク・生保・生損保契約・顧客管理システム、官公庁決済システム、鉄道会社車両管理・販売管理システムなど。
- DB設計～DB実装・運用でのデータ管理：鉄道会社車両管理システム、生損保会社リスク管理DWH、建設機械会社販売系DWH構築など。
- DB運用後評価・性能改善：通信キャリアアビリングシステム、鉄道会社販売システム、電力スマートメーターシステムなど。
- データマネジメント系：データマネジメントプロセス整備のためのコンサルティング。
- データ連携HUBシステム：車両サービス、精密機器、化学メーカー向け要件定義のためのデータモデル作成・データ連携定義。
- 教育・研修・講演活動：データモデリング入門コース、ビジネスユーザ向け入門基礎、モデリングワークショップ
- 著書・講座
 - 「実践的データモデリング入門」（株式会社翔泳社 2003）
 - 「ITエンジニアのためのデータベース再入門」（株式会社リックテレコム 2017）
 - 「ビジネス推進のためのデータモデリング入門」（Udemy講座 2021）
 - 「データマネジメントの実態と最新動向2025 調査報告書」（インプレス総合研究所 2024）著・監修 他

概要

- 生成AIの普及は、仕事や暮らしへの影響だけでなく、職業観念や世の中の仕組みそのものをも根底から変えようとしています。AIの出力精度を高めるためには、AIが学習対象とするデータの品質が求められます。即ちデータマネジメントが必要とされています。
- データマネジメントの基本は、「必要とするデータが何処にどんな形で存在しているのか」を明確にすることです。
- そのための1つの解が、エンタープライズレベルのデータモデルの作成です。データモデルを作成することにより、重複して散在しているデータを認識し、概念・論理的に整理してビジネスの実態と照らし合わせて把握することができます。
- データモデリングは古典的な手法ですが、AIの時代にもなお要請されている背景と実践的な手法をお伝えします。

内容

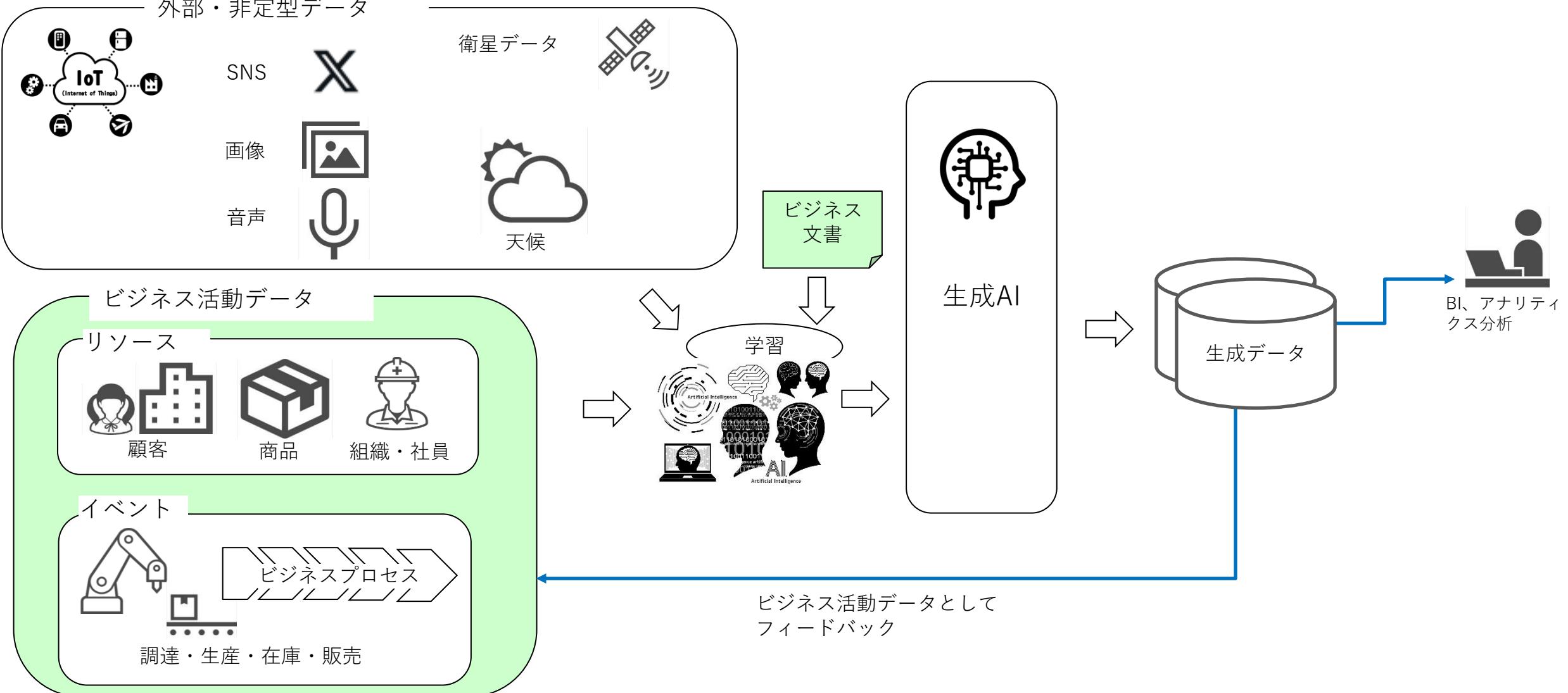
1. 生成AIになぜデータモデリングが必要とされるか
2. データマネジメントにおけるデータモデリング
3. エンタープライズ・データモデリングの進め方
4. エンタープライズ・データモデリング考慮点
5. (展望) データモデリングの課題とAIエージェントによる解決案
6. まとめ

1.生成AIになぜデータモデリングが必要とされるか

- 生成AIのエンタープライズシステムへの活用の背景
- AIデータを利用しようとした場合の課題
- データマネジメントが必要とされる背景

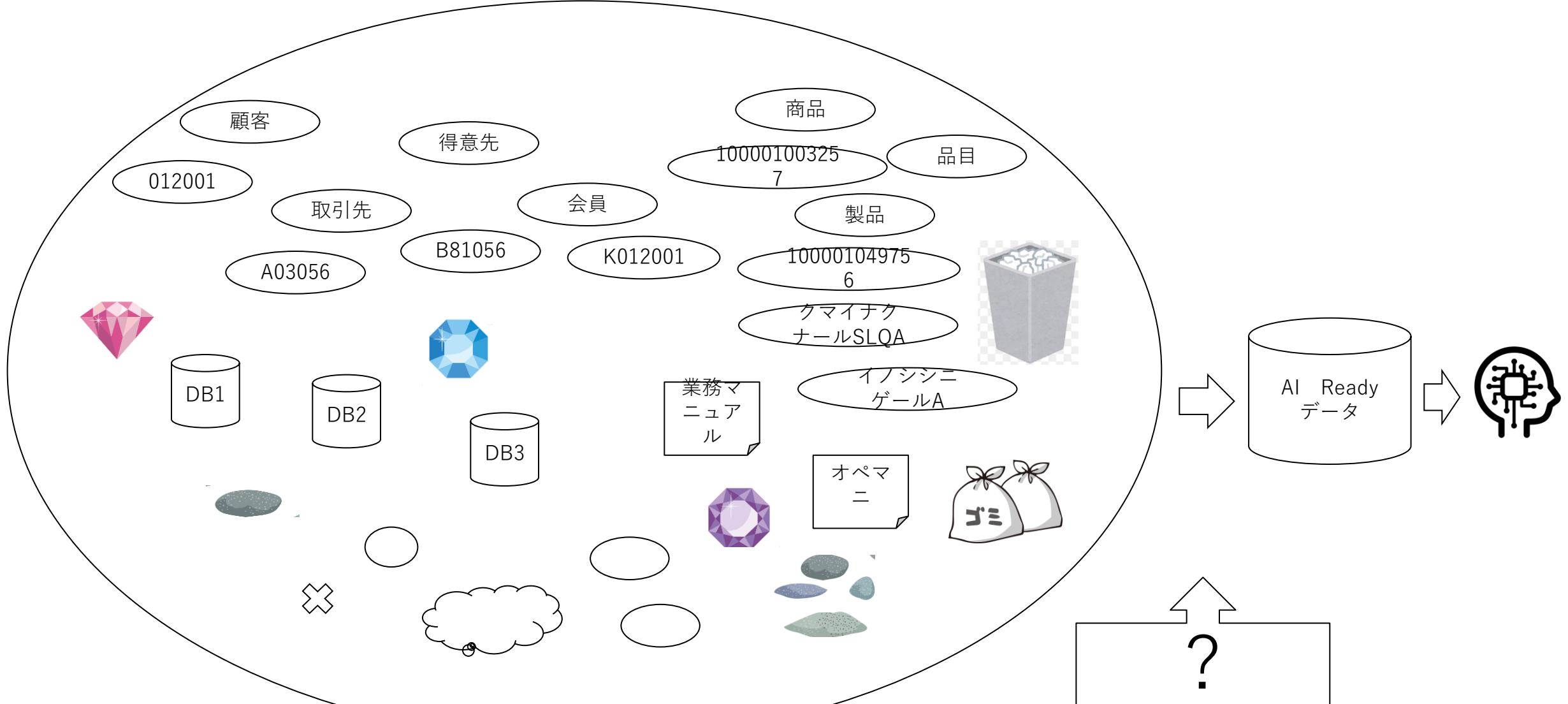
生成AIのエンタープライズシステムへの活用の背景

生成AIはビジネス活動の一部に組み込まれようとしている



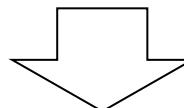
混沌とした未整理のデータ

今のデータのままでAIがうまく立ち回れるか



AIでデータ利用しようとした場合の課題

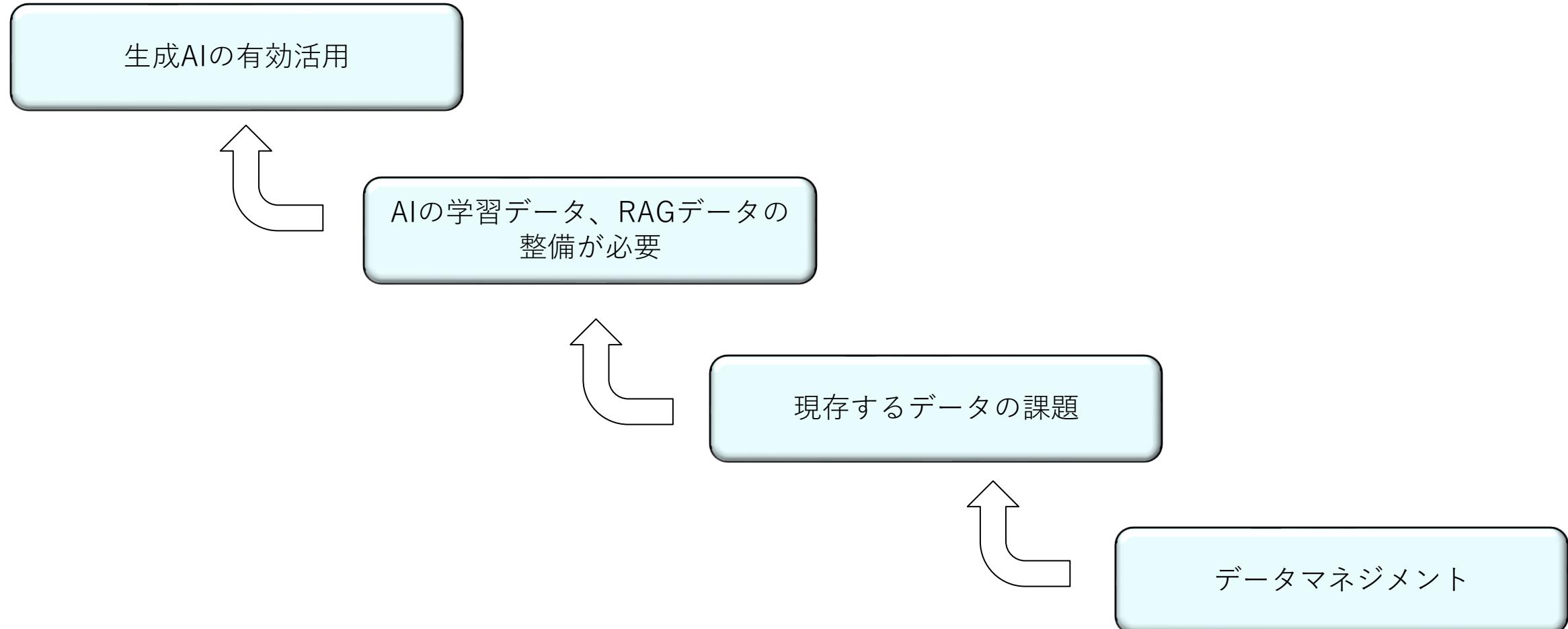
1. 同義のデータが何カ所（論理的にも物理的にも）散在していてどのデータを参照したらよいのかわからない。
2. 構造化データといっても実態は、データの重複や同義語などにより真に構造化された状態となっていないケースがほとんどで、そのままではAIも正しい判断ができない。
3. そのデータはどのようなデータであるかを表わしたメタデータが、ビジネス（業務）視点で定義されていない。文書上に記されたビジネス用語とデータ定義（エンティティ、属性）で名前が違っていて結びつかない。
4. AIが基にしているデータの出所（出典）が不明。源泉データが何でどのような経路を経てきたデータなのかが不明（経路や加工処理がブラックボックス状態）
5. 顧客、取引先、商品コードといったマスタを一意に識別するコードが不統一にもかかわらず変換表が確立しておらず、活動データや非構造化データとしてWebログやIoTデータとの紐づけ、名寄せができない。
6. 活動データの品質のバラツキが大きい。



AI Readyデータ整備が必要

データマネジメントが必要とされる背景

生成AIを利用には、現存するデータの整備が必要で、そのために、データマネジメントが必要とされる



例えば

- 例えば、グローバルに工場を有している企業での生産計画をAIに要求した場合を考えてみよう
 - ◆ グローバルでの調達コスト、生産能力、在庫最小化を考慮した最適な生産計画をたてたいという目標に対して
 - ◆ 日米中で同一製品でも異なった品番が振られているため同じ製品と認識できるよう構造化データを整備する必要がある
(M&Aや工場単位でERP、システムを導入した結果の末路として) ←データモデルが役立つ
 - ◆ サプライチェーン構築の考慮として、地政学的リスク（トランプ関税など）、地理要件を非構造化データとして加味する必要がある←データモデルの範囲外の不確定要素
(AIエージェントは、不確定要素を推論していく)
 - ◆ といった整備を行い、AIエージェントの入力値とする必要がある。

例えば

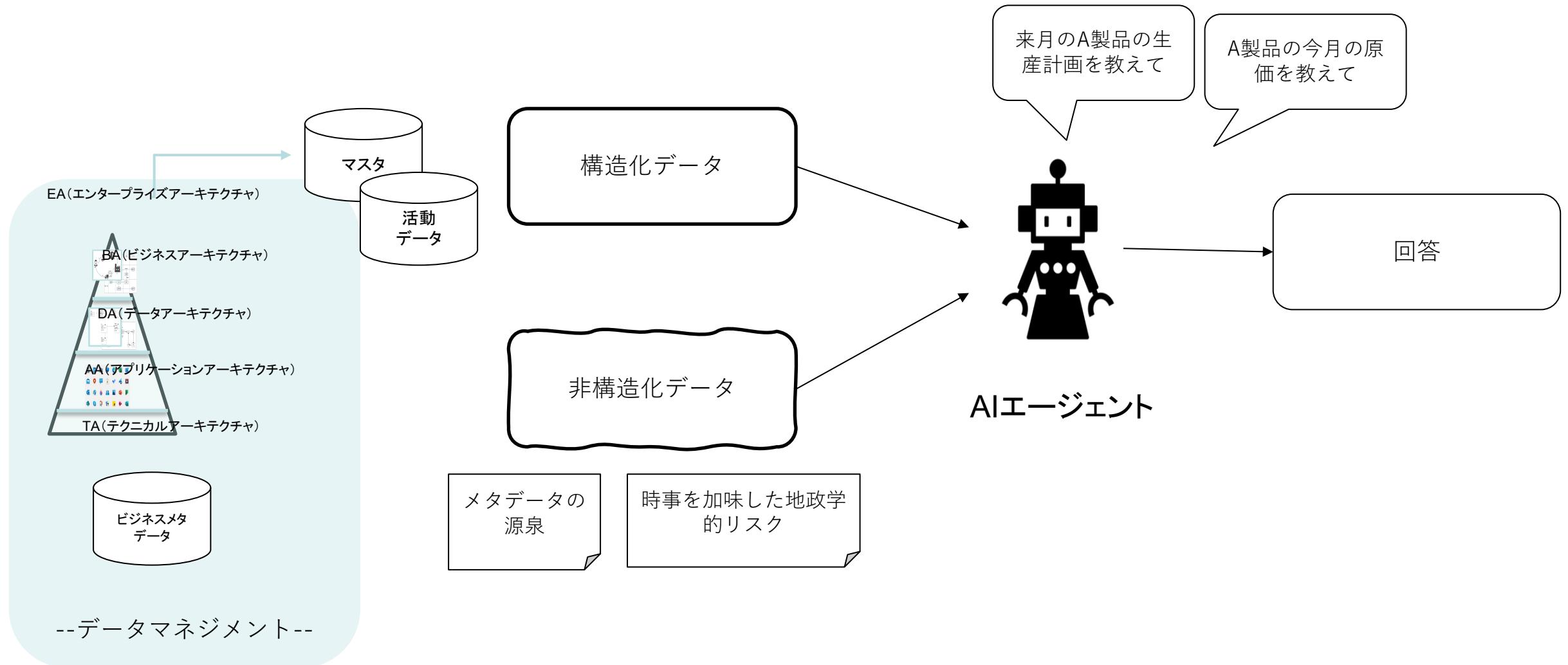
■ 「製品○○の原価を教えて」と問合せした場合 (ビジネス実態)

製品が、どのような部品や中間製品から構成され、各々の部品の原材料、製造工程に関わる工数、製造委託品については購入価格が解っていなければならない。そして製造に関わる部品表（BOM）が作成されていて、各部品が品目マスタと紐付いて、それが内製品か外製品か識別され、内製品の場合には製造加工に関わる直接工数が、外製品の場合には調達価格が解らなければならない。

さらに、以下のようなビジネス実態があるとしたらどうか

- ・部品表に登場する部品の内品目マスタに登録されていないものがある（集約部品としてまとめて品目登録している）。
- ・同一製品を複数の工場で製造しているにも拘わらず、品目コードが統一されておらずコードの読み替えが必要となる（MDMされていない）が別文書で管理している。

AIで必要とされるデータマネジメント



--データマネジメント--

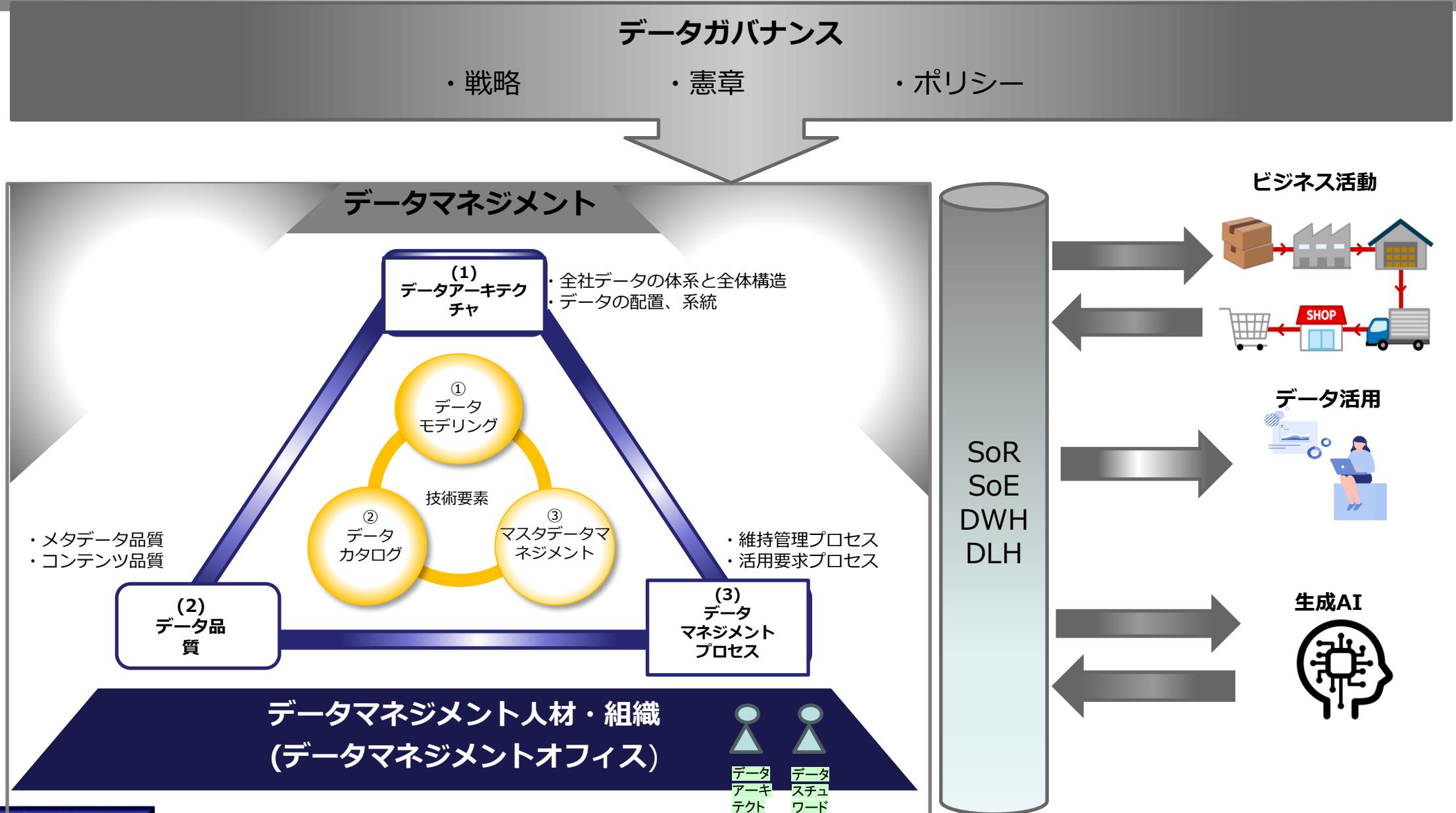
生成AIになぜデータモデリングが必要とされるか

- AIが学習対象とするデータには、日本語などの自然言語で記述された非構造化データと業務システム用のデータベースとして蓄積された構造化データがある
- 構造化データといっても実態は、データの重複や同義語などにより真に構造化された状態となっていないケースがほとんどで、そのままではAIも正しい判断ができない
- 個別の業務システムではうまくいっているが、システム間を跨がって捉えようとナレッジを伴った変換（読み替え）が必要となる
- 生成AIもそのままの形では、データの正しい把握ができない
- このデータの意味は何で、何処から発生して何処で加工されたものか、類似のデータは他にないかなどのナレッジ（メタデータと言っても良い）が正しいデータの把握に欠かせない
- そのために、データの所在と構造および関係性を示したデータ地図、データが何処から発生し、どのような経路を経て加工されたのかを示すデータ系統図が必要

2.データマネジメントにおけるデータモデリング

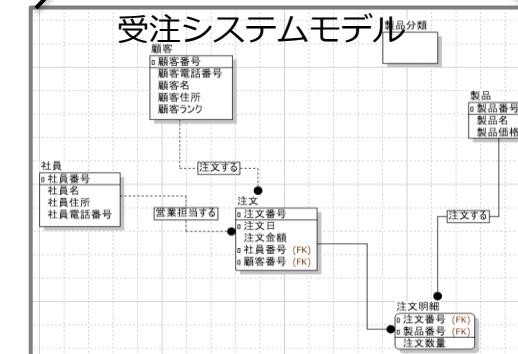
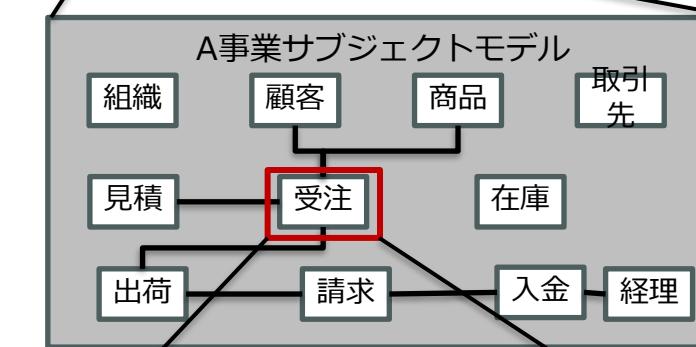
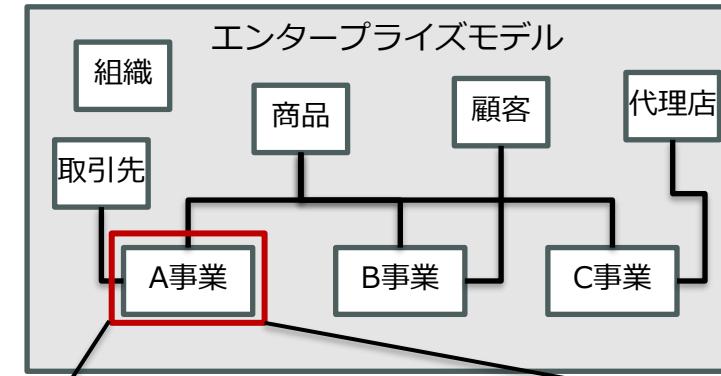
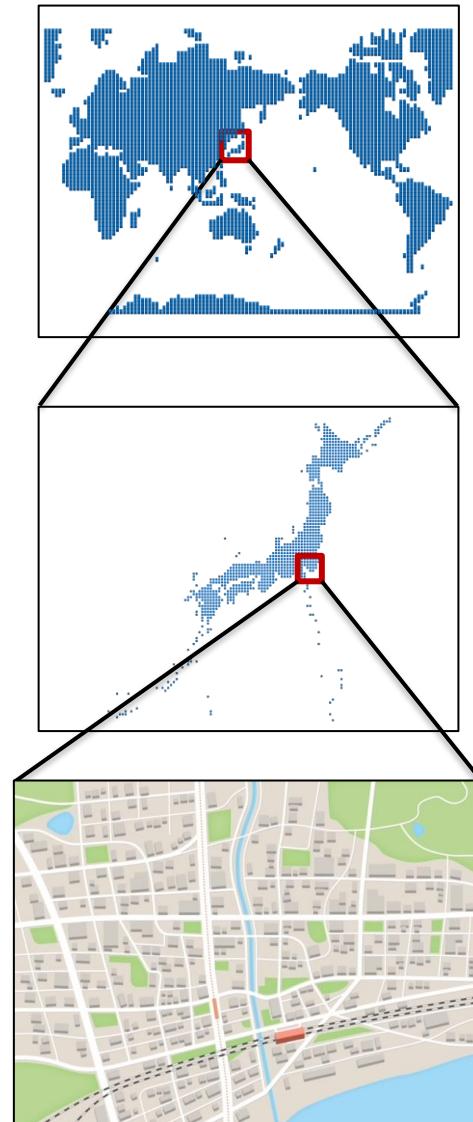
- データマネジメントとは
- データアーキテクチャ構築のためのデータモデリング
- データモデリングとは

データマネジメントとは



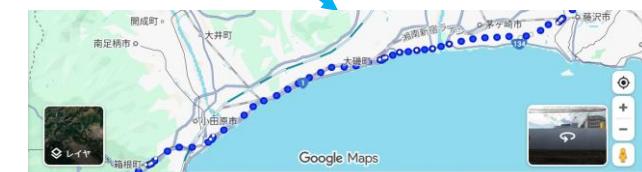
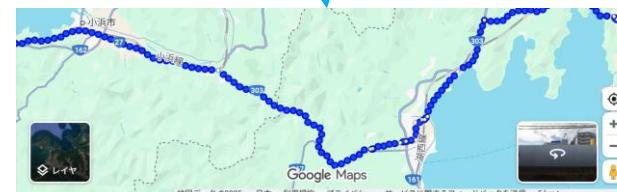
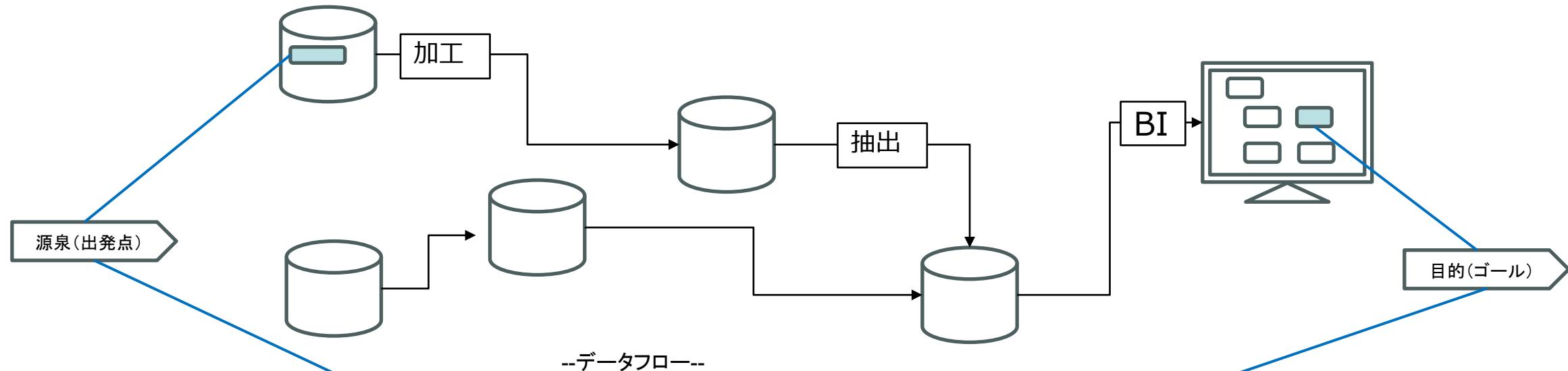
データアーキテクチャ（データ地図）

データアーキテクチャとは企業のデータ地図である



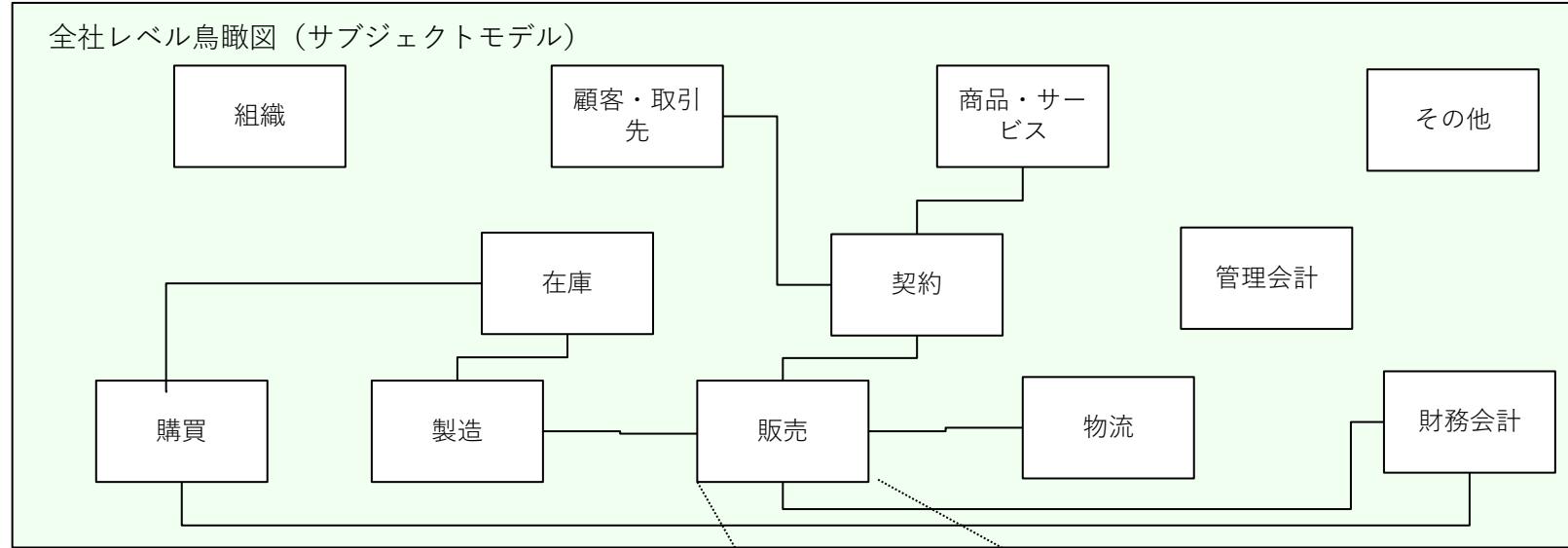
データアーキテクチャ（データ系統図）

データアーキテクチャとは企業のデータ系統図である

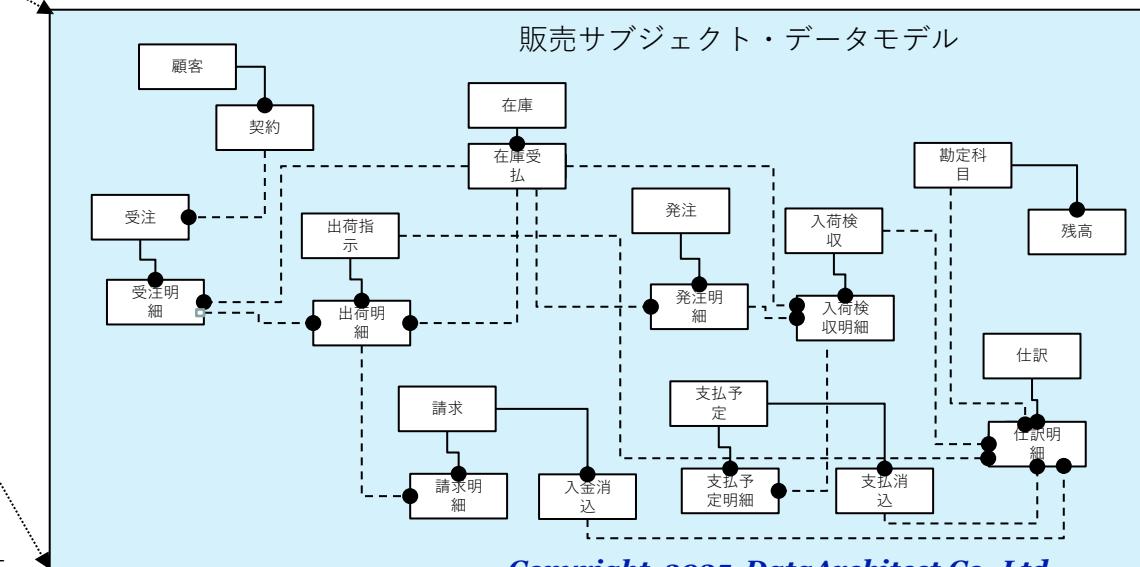


データアーキテクチャ（全社データ体系）

データアーキテクチャ例：全社レベルの統合図と販売サブジェクトモデル



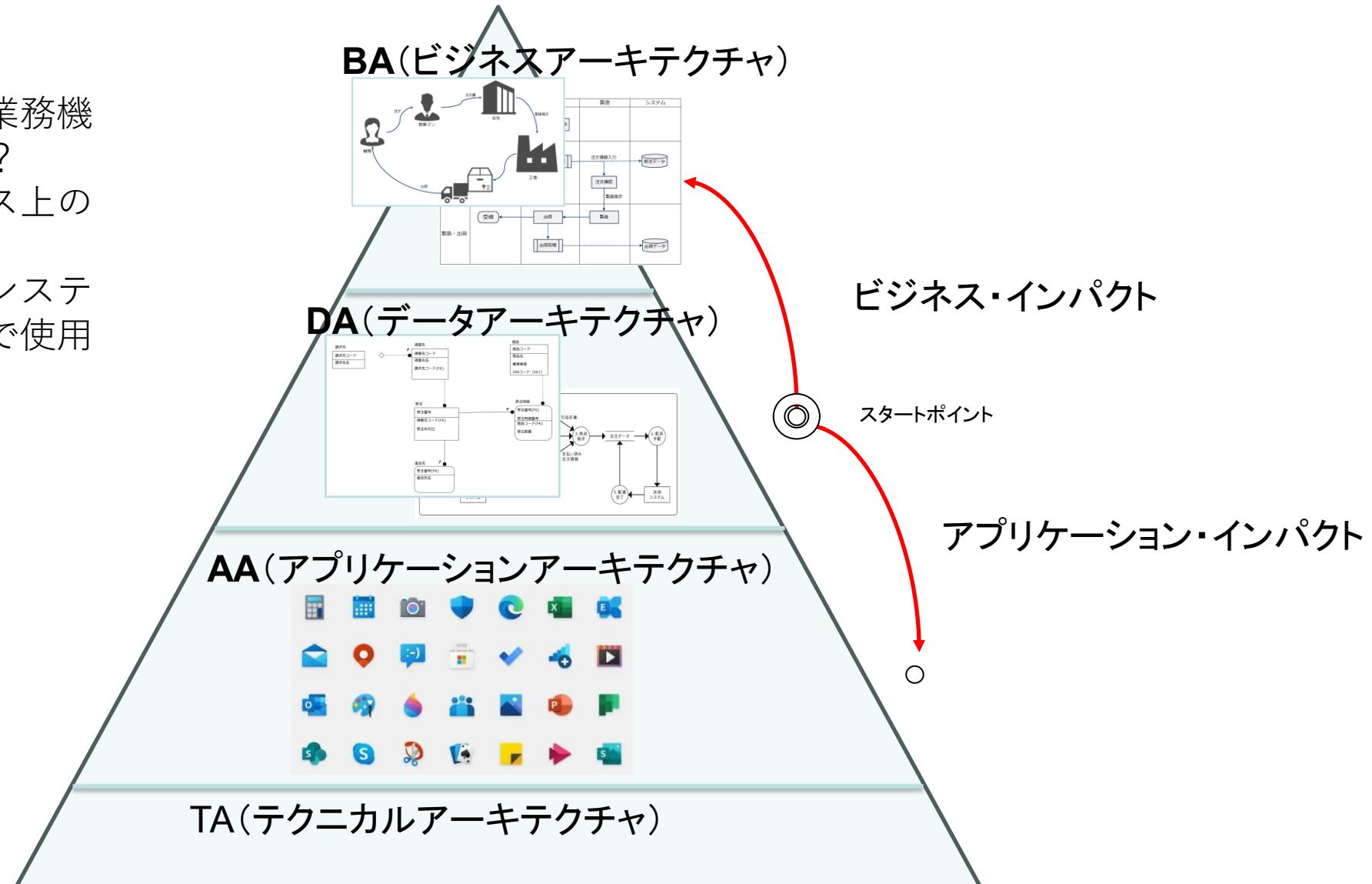
- 全社データをサブジェクトに分割した統合図：**世界地図**
 - サブジェクト単位のデータモデル：大陸毎の詳細図面
 - サブジェクトは、業務機能別にデータが密の関係であるものをまとめる
 - ERPでのパッケージング単位



データアーキテクチャからEAへ

- データアーキテクチャを起点とし、ビジネスアーキテクチャ、アプリケーションアーキテクチャへとの関係性を構築

- ✓ そのデータは、どの業務機能で使われているか？
- ✓ そのデータのビジネス上の意味定義は？
- ✓ そのデータは、どのシステムのどのプログラムで使用されているか



データモデルとは

- データモデルとは、ビジネス上必要なデータを構造的に捉えその関連を把握することによってビジネスの実態を表現した図版（単にデータベースの構造だけを表すものではない）

データモデリングには大きく2つの役割がある

なぜデータ地図が必要か

- ・個別業務領域のデータ構造（DB）を定義（設計）するため
 - ・生成AIで代替可能となっていくと考えられる
 - ・ボトムアップ分析では生成AIにより作業軽減が見込める
- ・企業全体のデータアーキテクチャ（データ地図）を作成するため
 - ・生成AIの時代によりマクロな観点でデータを捉える必要がある

- ・企業内外でのデータの所在を知るため
- ・データが何処で発生し加工集計され利用可能となるか
AIの出力のエビデンス

データモデリングとは

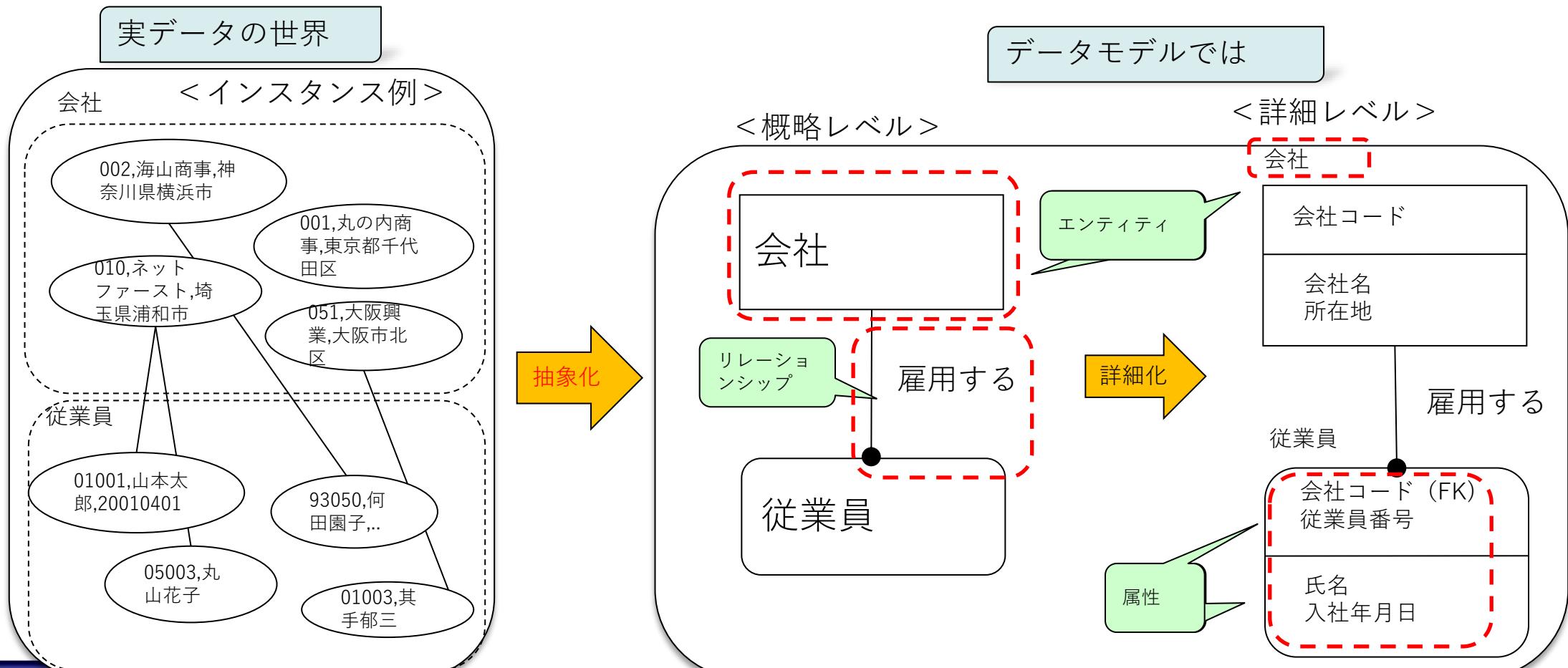
- エンティティ、リレーションシップ、属性の3要素でビジネス上の構造やルールを表現すること
- エンティティとは1属性または複数の属性の組合せで一意に定まる属性の集合体
- エンティティとエンティティの関連を捉える（1：多関係）
- 抽象化でビジネスを類型化
- 具象化でビジネスを分り易く
- 分類概念：排他か共存か
- インスタンスを充てはめて検証

データモデリングとは

- 実データを抽象化して表現したものがデータモデル

自然言語で書くとこんな感じです。「会社は複数の従業員を雇用している。ここで会社とは、自社（〇〇株式会社）を含む関連会社を指す」

「会社は会社コードで識別することができ、会社名や所在地といった属性を保有している。」「従業員は、会社毎に一人一人に従業員番号が振られており、氏名や入社年月日を登録している。」

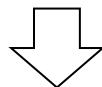


3. エンタープライズ・データモデリングの進め方

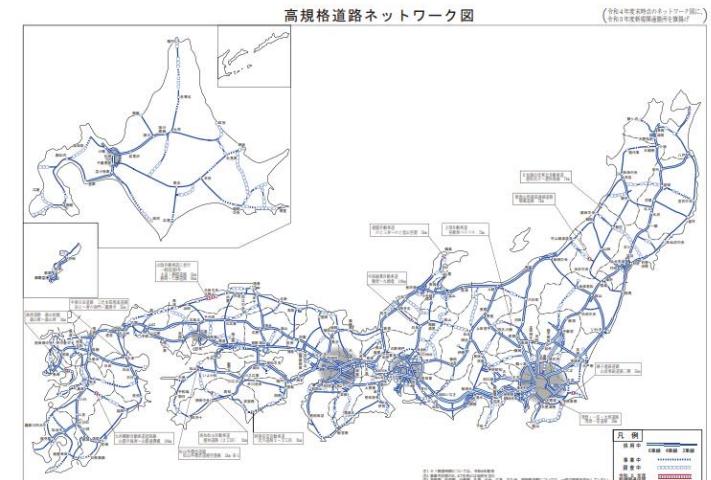
- どのような地図を描けばよいか
 - システム間のデータ連携図
 - 統合データモデル図
- どのような手順で地図を描けばよいか
 - 現状の姿を投影したASISを全体を鳥瞰しつつ個別を描く
 - ASISからTOBEへの変換
 - 目的に応じたTOBEを描く
 - TOBE変換ロードマップ

地図の表わし方

- エンタープライズデータモデル、即ちデータ地図を、2つのモデルで表す【ASIS】
 - ◆ システム間のデータ連携図 (システム内の保有データ：ストックとシステム間の流通データ：フロー) : 鉄道、道路
 - ◆ 全体を網羅したデータモデル図 (概念・論理) : 全都道府県・市区町村を網羅した日本地図



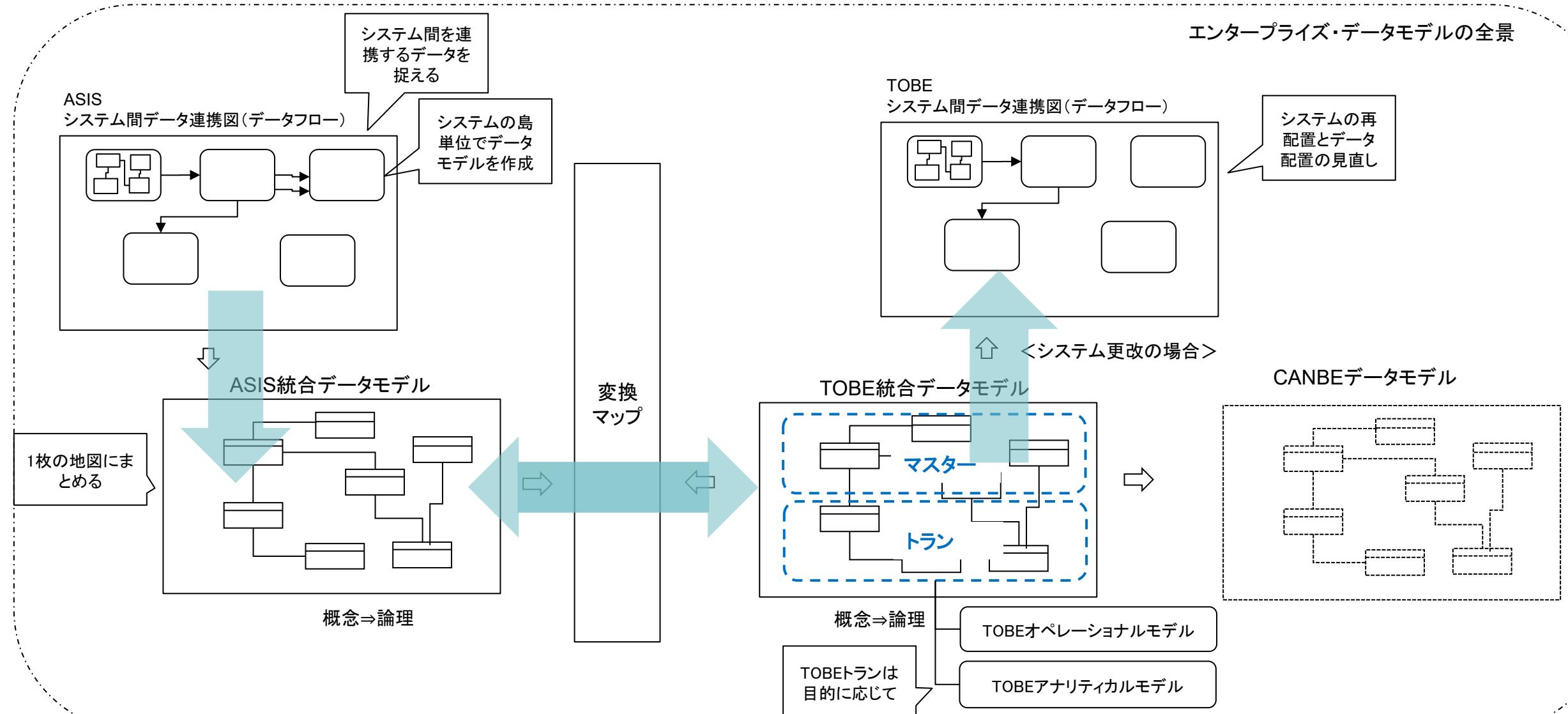
- 区画整理して、新幹線網や高速道路を整備する【TOBE】



国土交通省HPより引用 [001583490.pdf \(mlit.go.jp\)](http://001583490.pdf (mlit.go.jp))

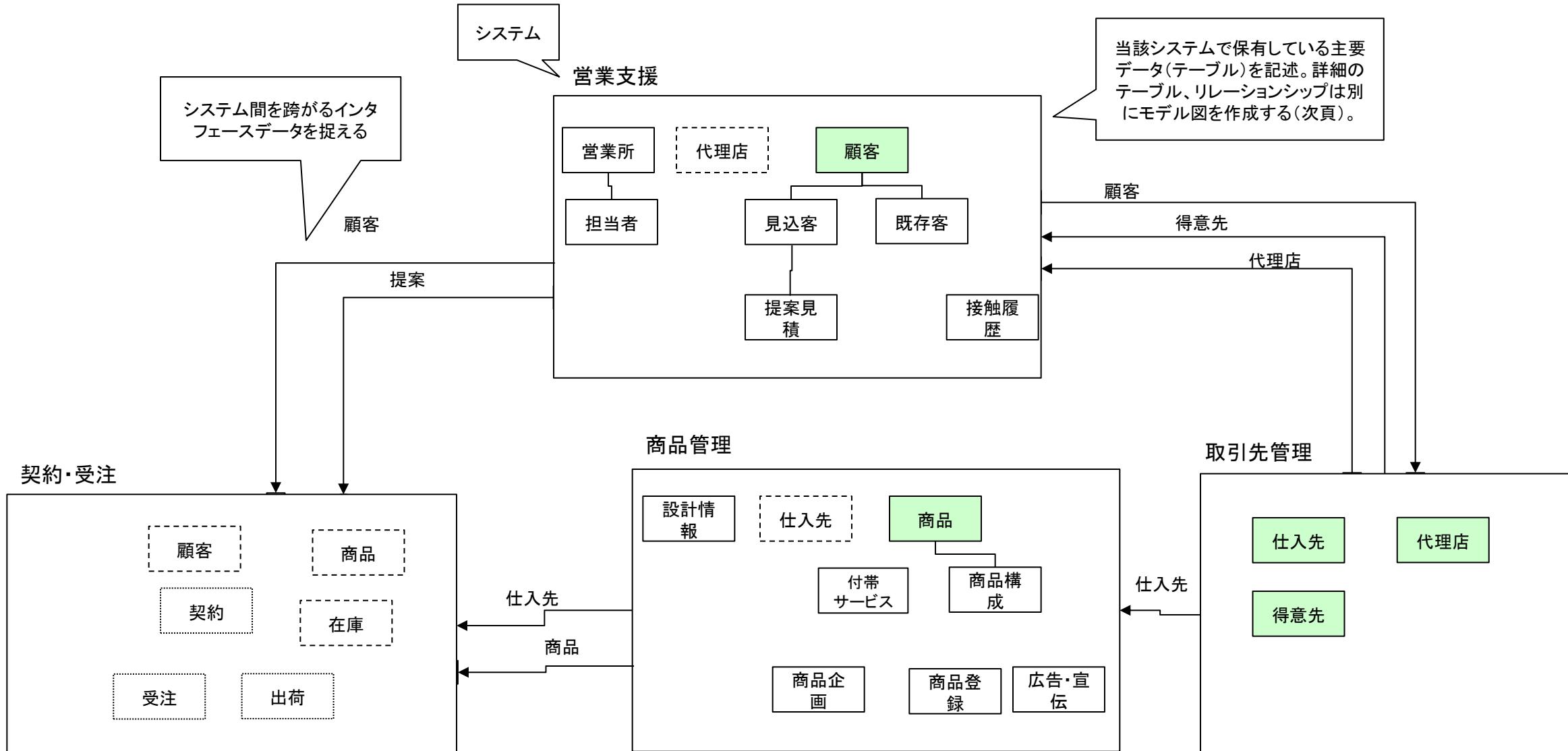
エンタープライズ・データモデリングの進め方

- ASISデータ連携図 ⇒ ASIS統合データモデル ⇒ TOBEデータモデル ⇒ TOBEデータ連携図と進める



システム間データ連携図（データフロー）

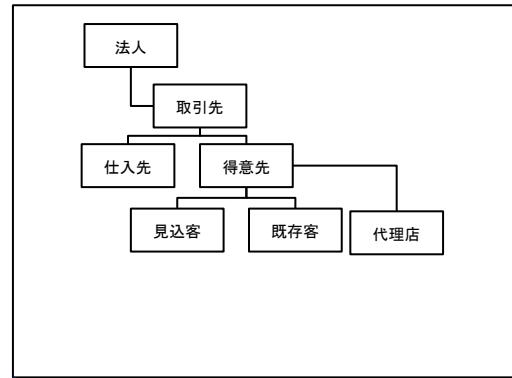
- 個別システムで保有しているデータとシステム間を連携するデータを掴む



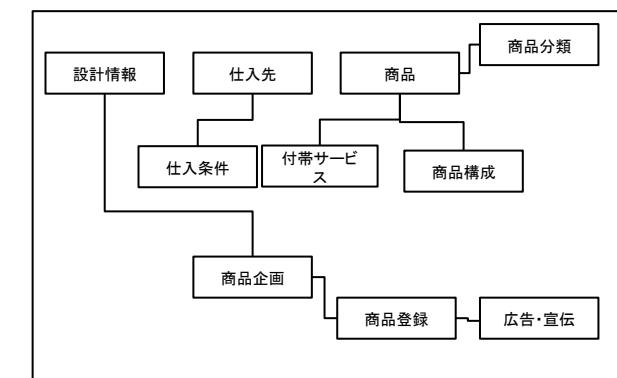
統合データモデル（エンタープライズ・データモデル）

■ 個別システム領域モデルから統合モデルを作成

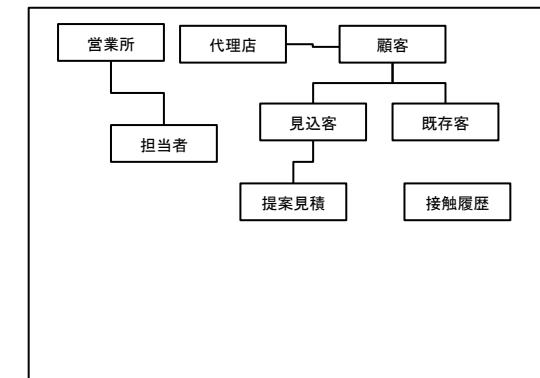
取引先管理



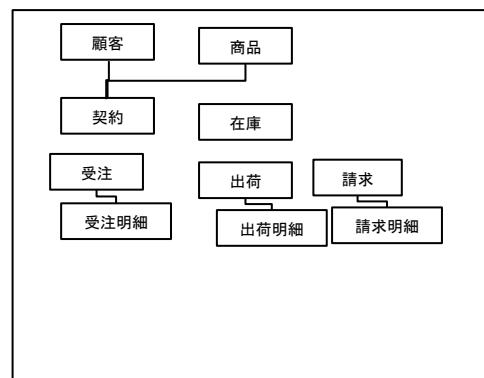
商品管理



営業支援



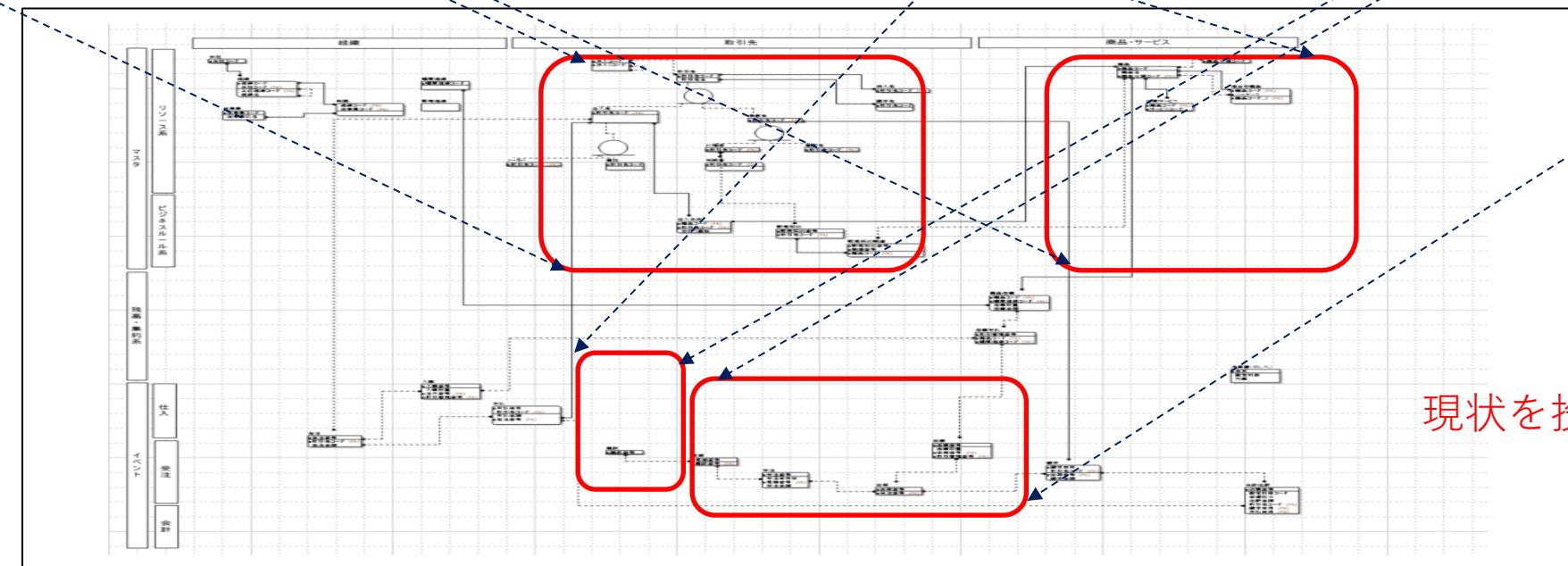
契約・受注



個別システム領域モデル

統合モデル

現状を投影したモデル



データアーキテクチャとしてのデータモデルの描き方

- データアーキテクチャとは会社の地図を描くこと
- 伊能忠敬はいかにして日本地図を描いたか
 - ◆ 伊能忠敬は、日本全国を歩いて測量して回り、「大日本沿海輿地全図（だいにほんえんかいよちぜんず）」を完成させた
 - ◆ 即ち、全体鳥瞰図無しでボトムアップで日本地図を作った⇒時間とお金がかかる
- まずは、全体を網羅した地図の作成全体を網羅していることが重要
 - ◆ 磁石で方向を見定めて
- 土地勘のある案内人（登山ガイド、シェルパ）
がいると効率的



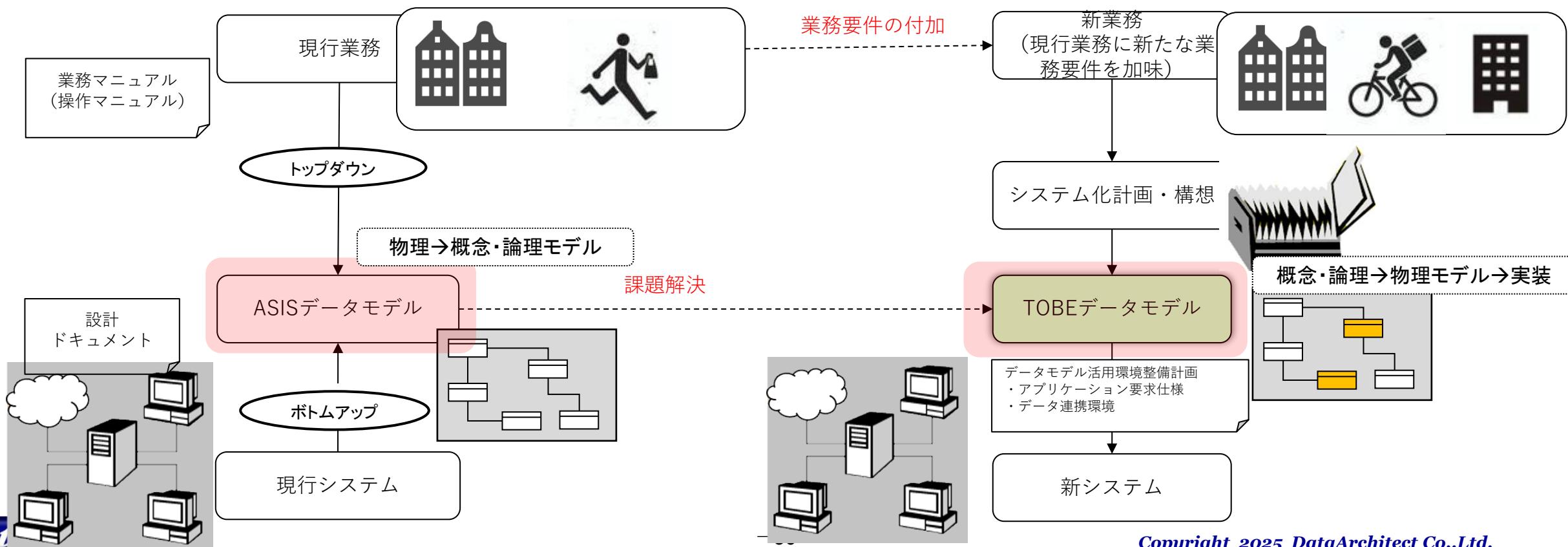
ASISからTOBEモデルへの変換

- ASISモデルでの課題を解決するモノ
- リソースとイベントで分けて捉える
 - ◆ リソースは課題解決、新ビジネス要求の取込を考慮したモデル
 - ◆ イベントは、オペレーションナルとアナリティカルに分けて捉える
 - 目的に応じて
 - システム更改⇒オペレーションナル：業務活動モデル
 - » 個別システムのデータ配置を見直し、TOBEシステム間データ連携図を作成
 - データ活用⇒アナリティカル：データ活用のためのモデル（ディメンジョナルモデル）
- ASISからTOBEへのデータ変換マップ
 - ◆ ASISとTOBEの対応表、変換テーブルを作成
 - ◆ 疎結合化のためのデータ連携基盤の準備

(参考) ASIS/TOBEモデリング

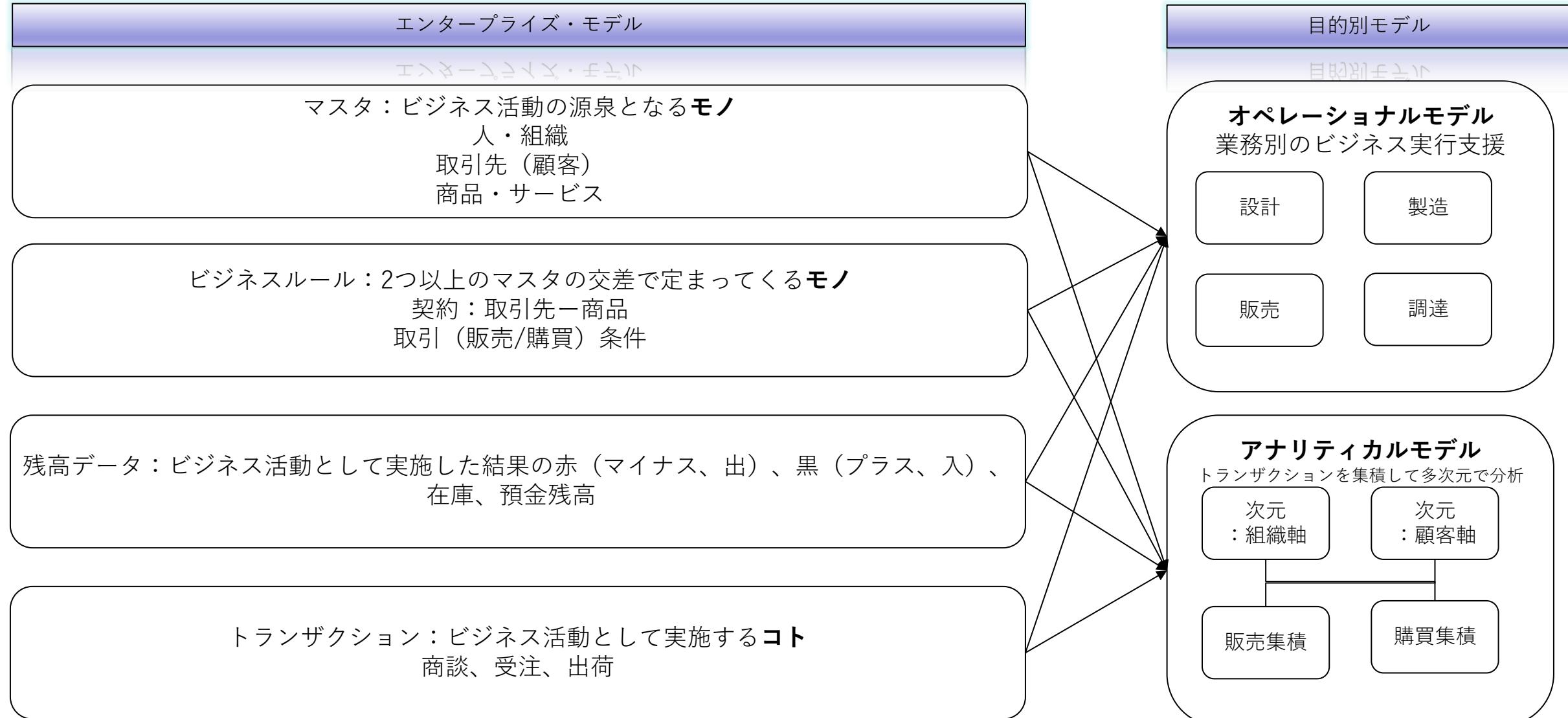
- モデリングは現行の可視化をターゲットとするかTOBEのシステムの姿を描くかの大きく2つの目的がある
- ASISモデル：現行のシステムまたは業務で取り扱うデータの姿を描いたもの
 - ◆ TOBEモデルを作成する場合の入力ともなる
 - ◆ TOBEを前提とせず、データ活用のための現状データの可視化のために作成する
- TOBEモデル：現行のシステムの課題を解決または新たな業務要件を加味したあるべき姿を描いたもの
 - ◆ ASISモデルに新業務要件を加味して作成する（差分モデリング）
 - ◆ ASISモデル無しに新業務要件を基に作成する

TOBEシステム要求が無くてもデータアーキテクチャ（データ地図）としてTOBEモデルの作成は必要



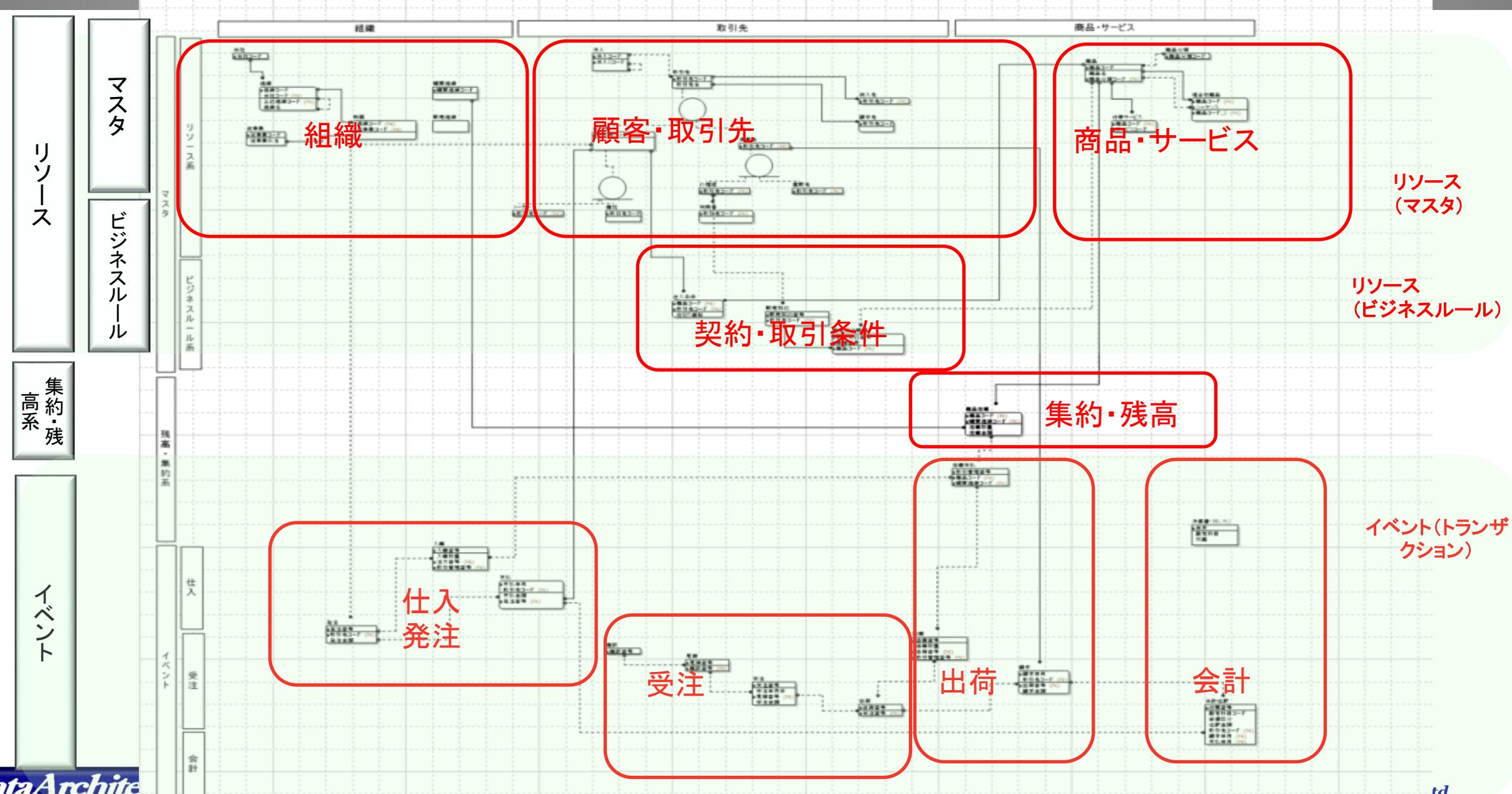
エンタープライズデータモデルの構造

TOBEデータモデル



エンタープライズデータモデル・統合図

TOBEデータモデル

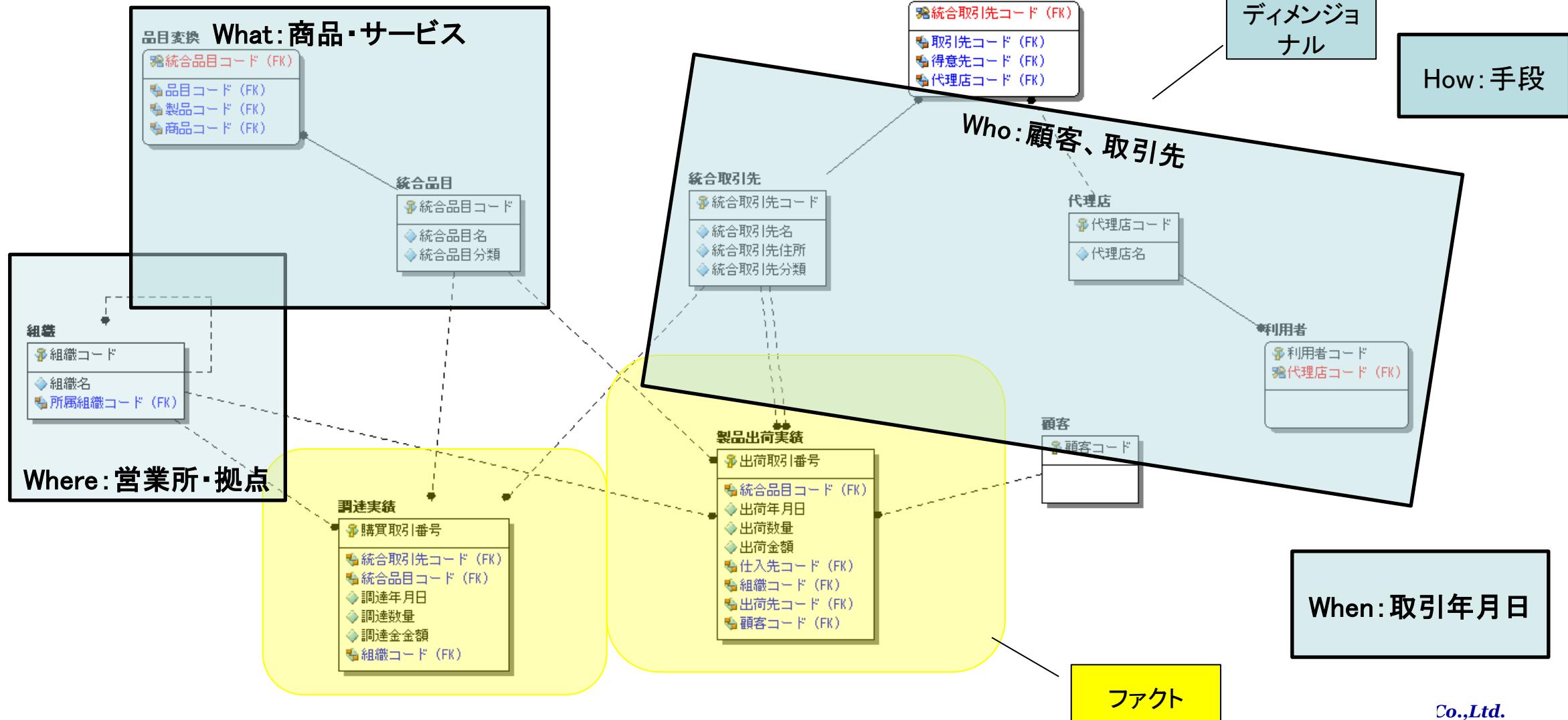


アナリティカルモデル

ファクトとディメンジオナル

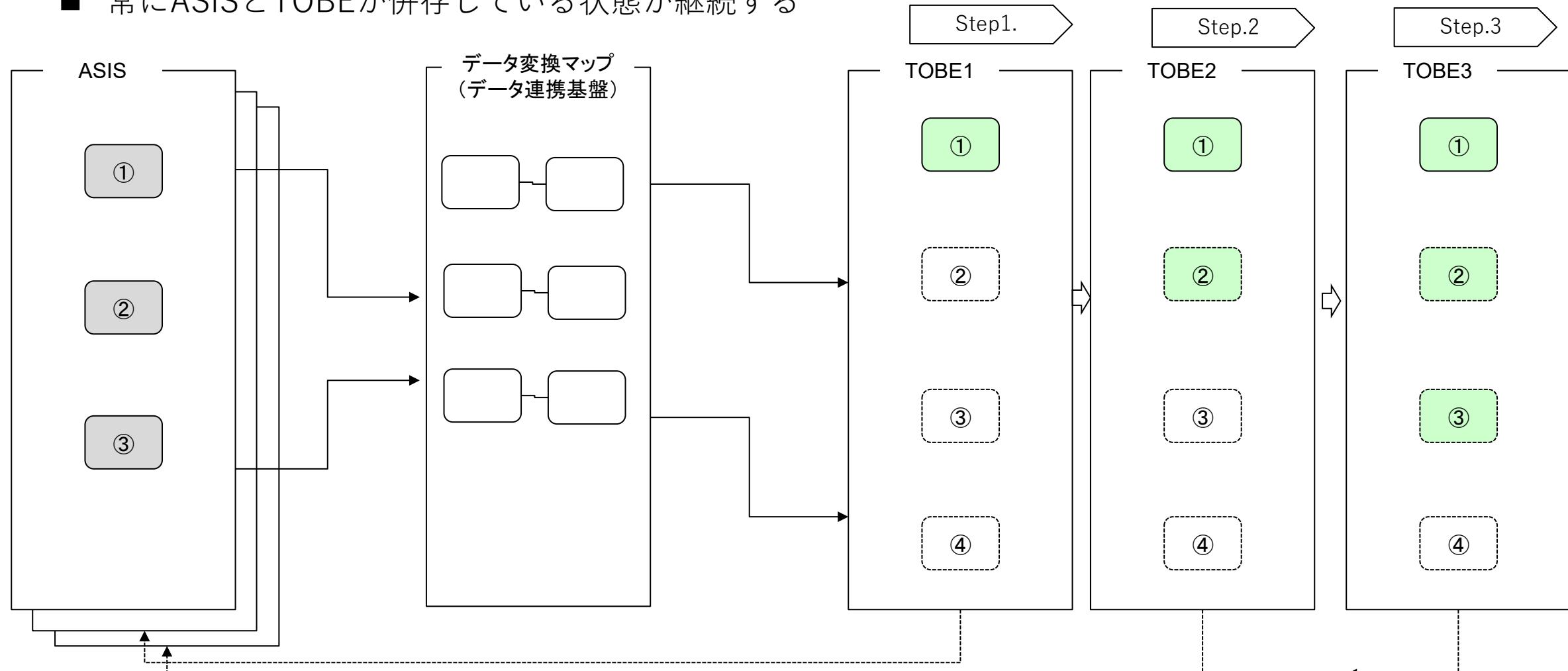
ファクト: 調達、製品出荷が取引実績というファクトを表すエンティティに出荷年月日、出荷数量、出荷金額といった分析対象のデータが蓄積されている

ディメンジョン: 分析軸としての組織、品目、取引先といった次元データ



TOBE変換ロードマップ

- ASIS⇒TOBEの変換を担うのがデータ連携基盤
- TOBE変換のロードマップを描く
- 常にASISとTOBEが併存している状態が継続する



4. エンタープライズ・データモデリング考慮点

- リソースモデルの考慮点
 - 取引先（顧客）
 - 商品・サービス
 - 組織
- イベントモデルの考慮点
 - オペレーションモデル
 - システム更改を前提に
 - アナリティカルモデル
 - データ活用
 - データ主導経営に向けて
- 全体考慮点
 - 配置ルールで表現力アップ
 - データモデルシナリオの作成：モデルにストリー性を持たせる

リソースモデルの観点

■ 組織

- ◆ 組織変更、人事異動への迅速な対応
- ◆ 人事組織と機能組織

■ 商品

- ◆ 分類軸
- ◆ 新たな商品のパッケージング
- ◆ サービスとの抱き合わせ
- ◆ 新たに商品マスターを作る

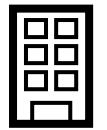
■ 取引先（顧客）

- ◆ 債権者以外の取引先の扱い
- ◆ 対面している顧客の先にいる真のユーザーの把握
- ◆ 顧客の組織・担当者の把握
- ◆ 金流、物流、ビジネス流から

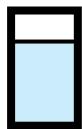
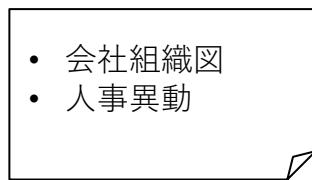
リソースモデル：（社内）組織の掌握

- 組織モデルは、会社の組織構造を階層関係で表したものといえる
 - ◆ 必要に応じて関係会社（ホールディングス）組織、顧客組織などを捉える
- 従業員がどの組織に所属しているのかの所属関係を捉える
- 人事組織とは別に、販売、購買、物流といった業務遂行組織がある
- 人事異動時の洗替え処理の考慮が必要となる

<源泉>



ビジネス

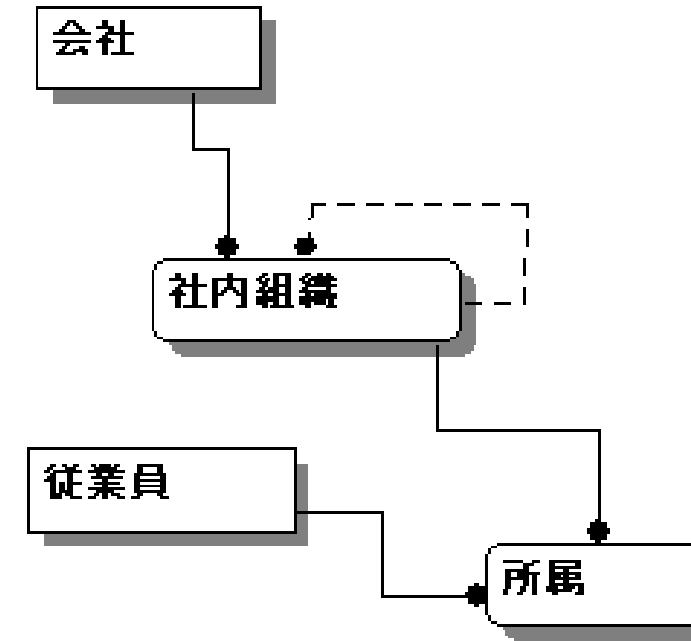


ITシステム



- ・設計図書

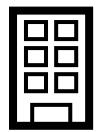
<データモデル>



リソースモデル：商品・サービスの掌握

- ビジネスの源泉である商品・サービスの構成・構造を捉える
 - ◆ 製造業、小売、サービスによって異なる
 - ◆ 製造業でも化学系の装置産業、機械・自動車などの組立産業によても異なる
- 取扱い品目の種類と品目の構成（設計BOM、製造BOM、販売BOM）が基本となる
 - ◆ 品目、製品、商品といった用語が同義語的に用いられている場合と異なった概念で使われている場合があり、各社各様での把握が必要となる
- サービスも商品に含めて捉える

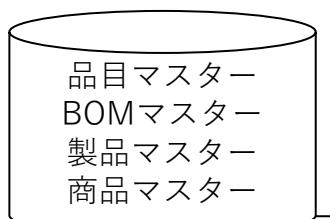
<データモデル>



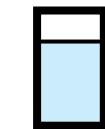
ビジネス

- 品目コード表
- 製品カタログ
- 部品表
- サービス一覧
- 保守サービス

<源泉>

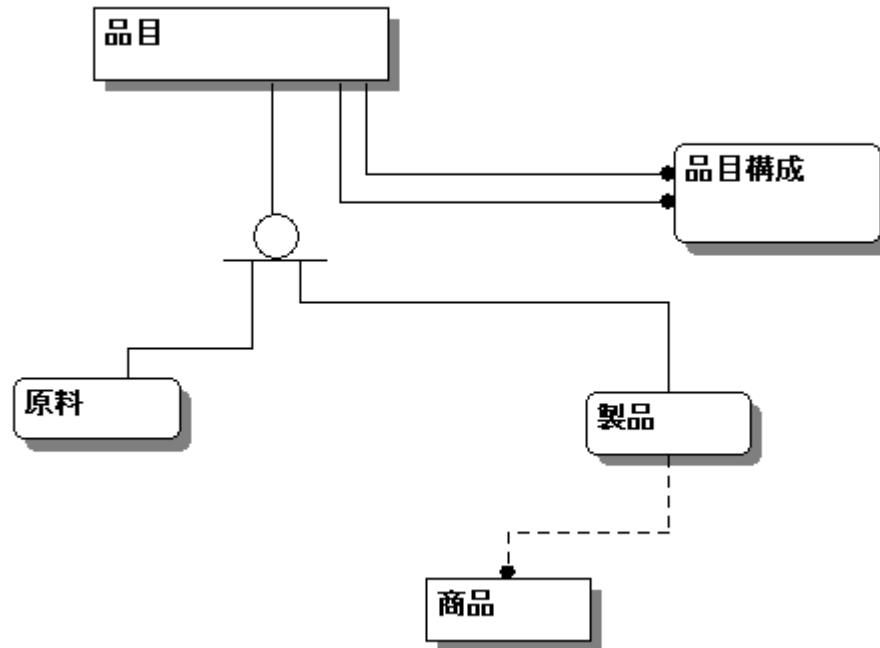


- 設計図書



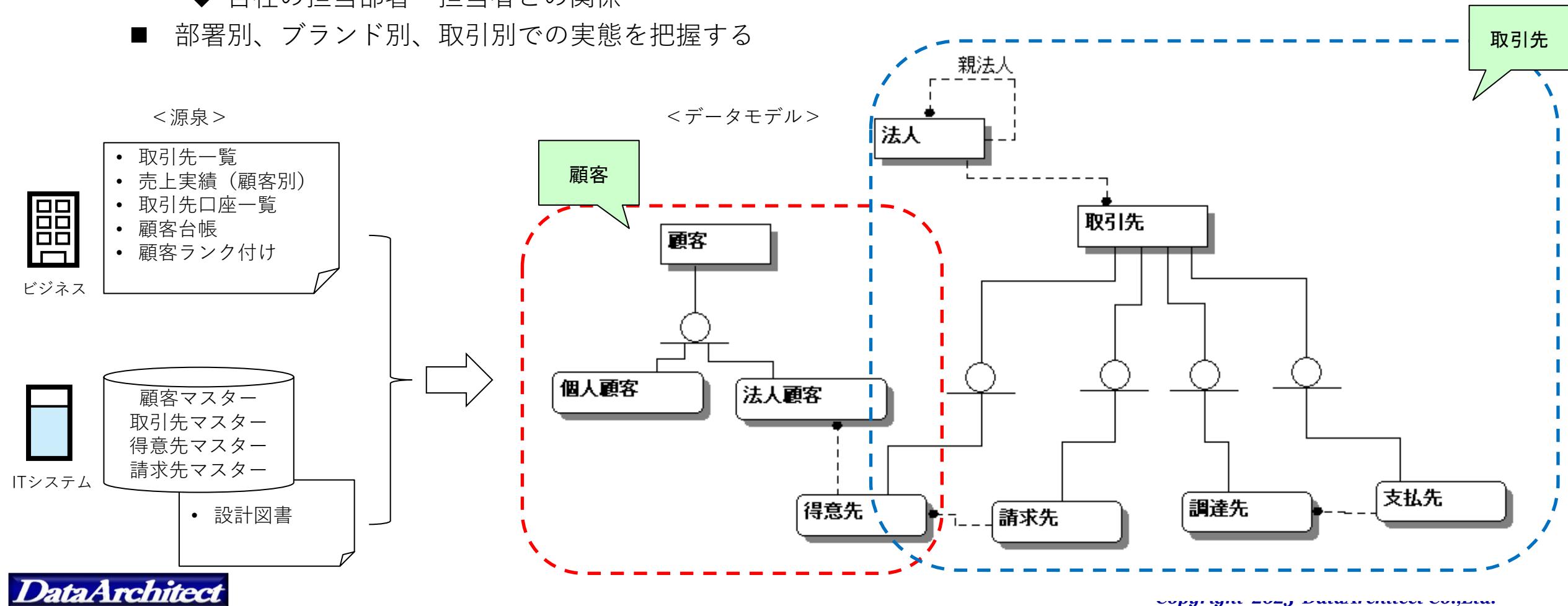
ITシステム

BOM: Bill Of Material 部品表



リソースモデル：顧客・取引先の掌握

- 自社の顧客を明確にするため：見込み客、個人客・法人客、取引先、取引先の販売代理店、消費者、．．．
- 取引先（得意先／調達先、債権先／債務先、関係会社／販売委託先、．．．）とそのビジネス取引関係を掌握するため
 - ◆ 営業接触先と商品・サービスの提供・搬入先、債権・債務先の関係を捉える
 - ◆ 自社の担当部署・担当者との関係
- 部署別、ブランド別、取引別での実態を把握する

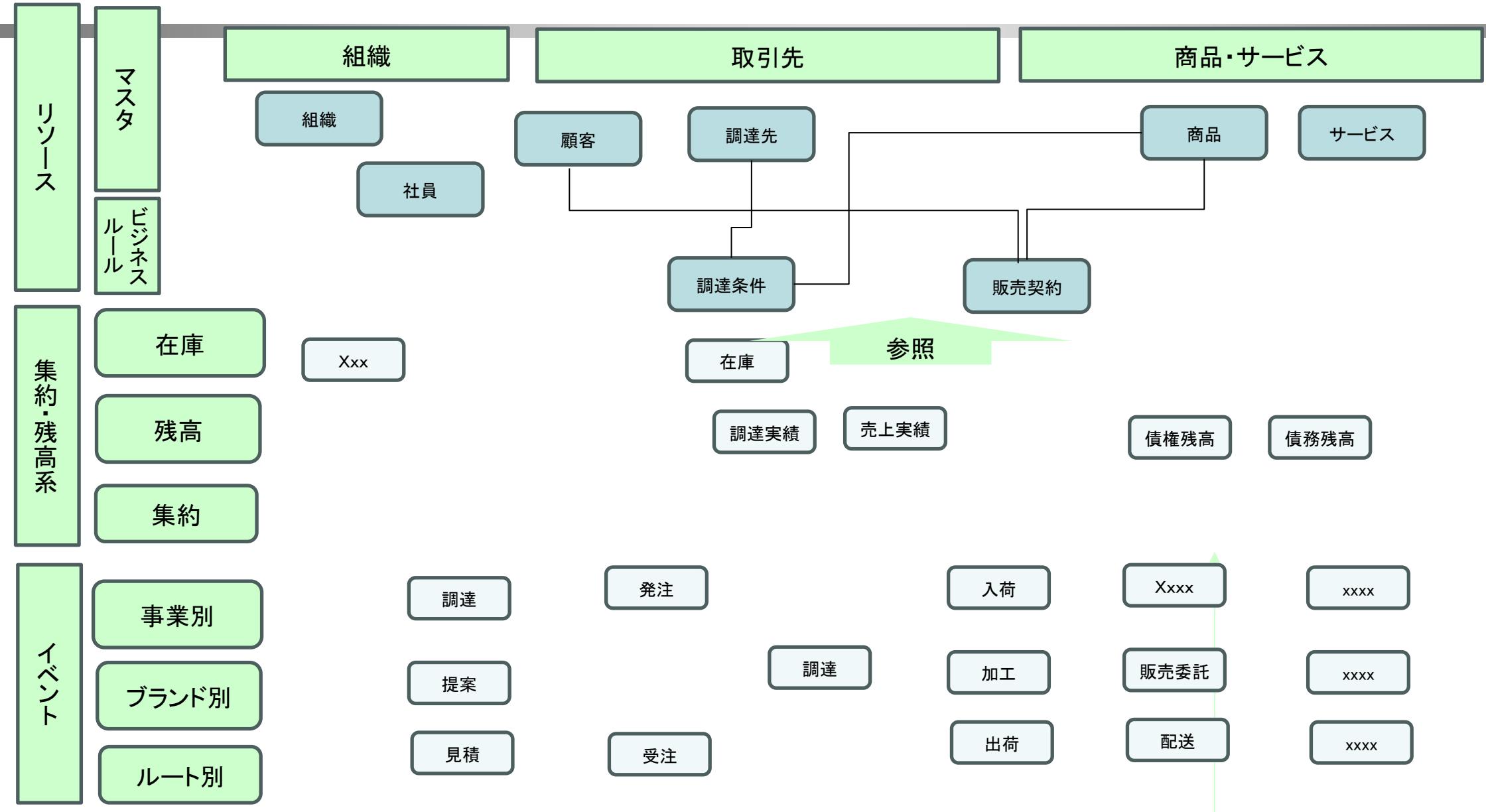


イベント・残高系モデルの考慮点

- ASISモデルは、現状のあるがままを描く
 - 受注データの書式が複数あればそのまま
 - 何を基に作成するか？：テーブル定義書、実データ、ヒアリング
- TOBEモデルとして何を描くか
 - 新たなビジネス要求・要件
 - ASISデータ構造の課題解決
- オペレーショナルモデル
 - システム更改を前提に
 - 個別システムへの適正配置
- アナリティカルモデル
 - データ活用
 - データ主導経営に向けて
 - トランザクションを集積（売り/買い/在庫、..）
 - データ分析軸（次元）と対象データ（ファクト：件数、数量、金額）が充足されている

エンタープライズデータモデルの配置（例）

ポイント！

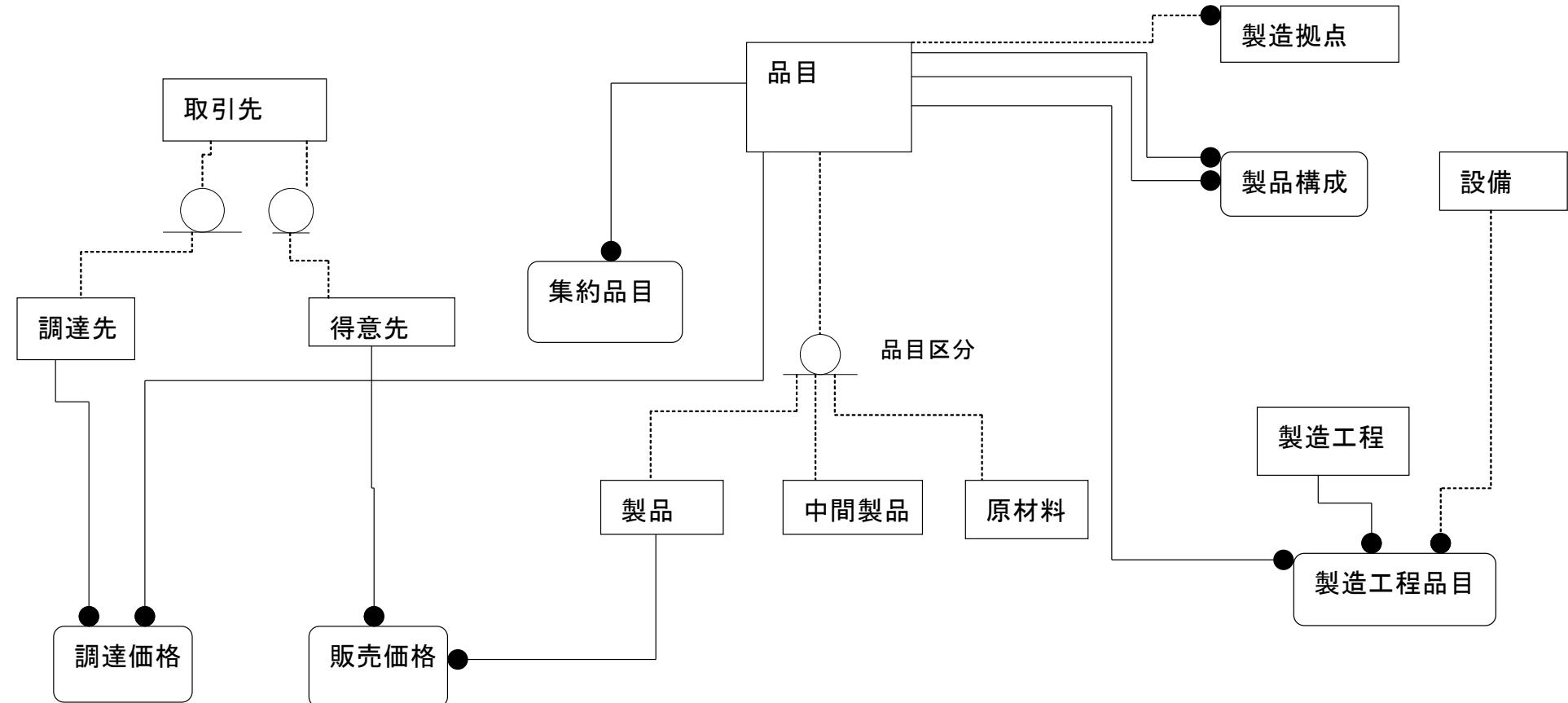


モデルのシナリオ記述化

- データモデルのナレッジをシナリオとして記述しておく
- AIへのインプット、他者への説明、振返りでも有益
- データモデルだけでは、実ビジネスとの拘わりが伝わりづらい
 - ◆ 自然言語での曖昧な表現を厳格に表現したものが、データモデルであるが
- データモデルをビジネス・ストーリー化しておくことにより脳裏に焼き付けることがきる

製造管理のモデル例

モデル図は説明を聞けば解るが、見ただけでは頭に入りづらい
プロンプト>「製品○○の原価を教えて」



製造管理モデル例のシナリオ記述

- 取引先には、部品の調達先と得意先が含まれる。
- 品目は、製品または中間製品、原材料部品のいずれかに品目区分で分類できる。
- 品目は多数の部品が組み合わされており、その親子関係を製品構成で定義している。
- 同じ部品が、複数の製造拠点で作成されており、拠点毎に異なった品目コードが振られているが、統合品目コードとして共通の品目コードに変換している。
- 品目には、同等の機能品質を持ったものがあり、集約品目としてまとめられている。製品構成は集約品目として登録されている。
- 調達先毎に原材料部品の調達価格が定められている。得意先毎に製品の販売価格が定められている。
- 製造工程毎の単位時間と所要時間が設定され、工程毎に関与する品目が決まっており、どの設備を使用するかが決まっている。設備毎に原価計算用の利用金額が定められている。製品および中間製品の品目単位での概略の製造コストは、製造工程毎の単位原価×所要時間 + 利用設備の利用料金で算出される額から原料の調達金額を差し引いた金額となる。

エンタープライズ・データモデリング時の考慮点

- 鳥瞰図と詳細画面の併用で迷子にならない
 - ◆ 全体鳥瞰をラフスケッチしてから個別分析へ：全体、個別は行ったり来たり・・・概念⇒論理モデル、システム間連携⇒統合モデル
 - ◆ 全体配置上でのエンティティのポジションを確認しながら・・・データモデルは「静」なので配置が「動」の要素を補完
- 類似モデルの利用
 - ◆ 業界モデルやERPモデル、他社でのベストプラクティスモデルの流用
- マスターとイベントで分けて考える
 - ◆ マスターはビジネス実態の投影、イベントは処理シーケンスと明細（トラン）、集約関係（残高）
- 基本に忠実に正規化を行う
 - ◆ 例えば、繰返し属性がエンティティ内に埋もれるとキーとしてモデル表面に現れず、ビジネスルールが表現できない
 - ◆ データをどう持ちたいかではなく、このデータは何によって定まるかをビジネス視点で追求していく
 - 処理のし易さからデータ構造を定めてはいけない！
- 業務システム（XXシステム）固有の特性をとらえる
 - ◆ トランザクションの構成は、システム特性に依存すると捉える
 - ◆ 特性に沿ったイベント層の配置を行う
 - ◆ エンタープライズモデルとしては、マスター構造、ビジネスルールの定義が重要と捉える
- 土地勘のある人（シェルパ）を巻き込む
 - ◆ 業務部門は、データ間の1:n関係を肌で捉えており、積極的に参画してもらう
- 現行システムのデータ構造に固執しない
 - ◆ 現状のデータ構造に固執すること無く、本来のキーと従属関係に立ち返る（中々難しい）
- モデリングツールの利用
 - ◆ そこそこ、変更は楽。リレーションシップ関係でのごまかしがきかなくなる
 - ◆ 整合性やメタデータ管理を行う上でも楽

データモデルの基本テクニック

■ 抽象と具象の往復

- ◆ インスタンスとメタの往復
- ◆ メタレベルでの抽象化（汎化）と具体化
- ◆ エンタープライズモデル（特に概念モデル）では、抽象化しすぎて、業務の姿が見えなくなることを避ける

■ 分類して体系化することによりエンティティの実体を知る

- ◆ 排他関係か共存関係か
- ◆ サブタイプ毎の保有属性は

■ ロールという概念

- ◆ 一つのリソースが、役割を変えてビジネス活動（イベント）に登場する
- ◆ 取引先・顧客・組織の役割見直しなど

5. (展望) データモデリングの課題とAIエージェントによる解決案

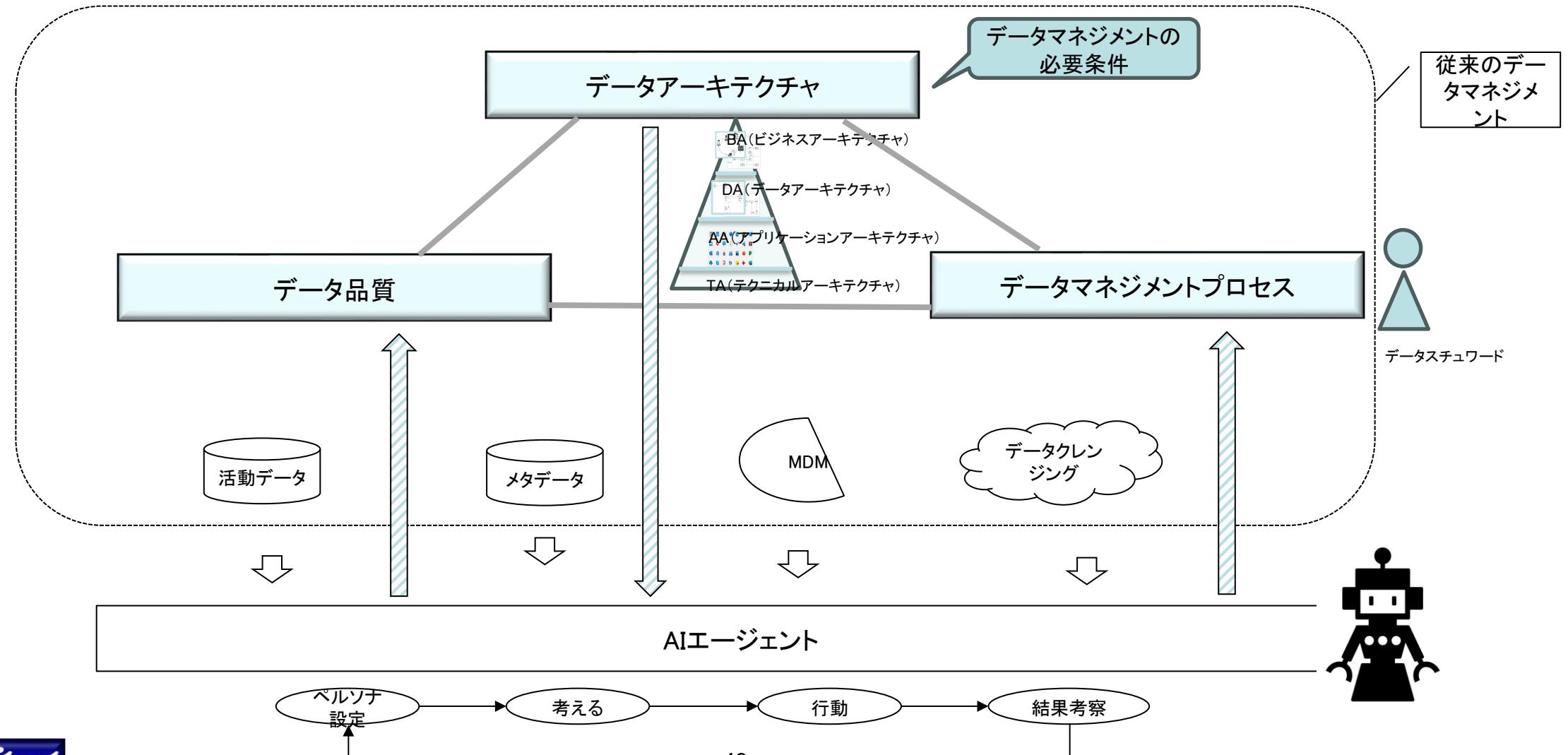
- データマネジメントの課題
- AIエージェントによる解決案

データマネジメントの課題

データマネジメントの構成要素	課題	将来展望
データアーキテクチャ	<ul style="list-style-type: none">作成済みのデータアーキテクチャ（データモデル）を掌握した人材が不在で未活用改変が行われず陳腐化BA,AAとの連携が不足	<ul style="list-style-type: none">AIエージェントによる改変用語、メタデータ整備、EAへの拡充（DA-BA、DA-AA）でAIへのナレッジとする
データ品質	<ul style="list-style-type: none">MDMが継続維持できていない定期的なプロファイリングが行われず品質が経年劣化	<ul style="list-style-type: none">AIエージェントによるスチュワード支援・代行AIエージェントによる継続的なクレンジング
データマネジメントプロセス	<ul style="list-style-type: none">データマネジメント職務の非継続性ビジネスメタデータの定義が属人的	<ul style="list-style-type: none">AIエージェント自身によるメタデータの取得による自律成長

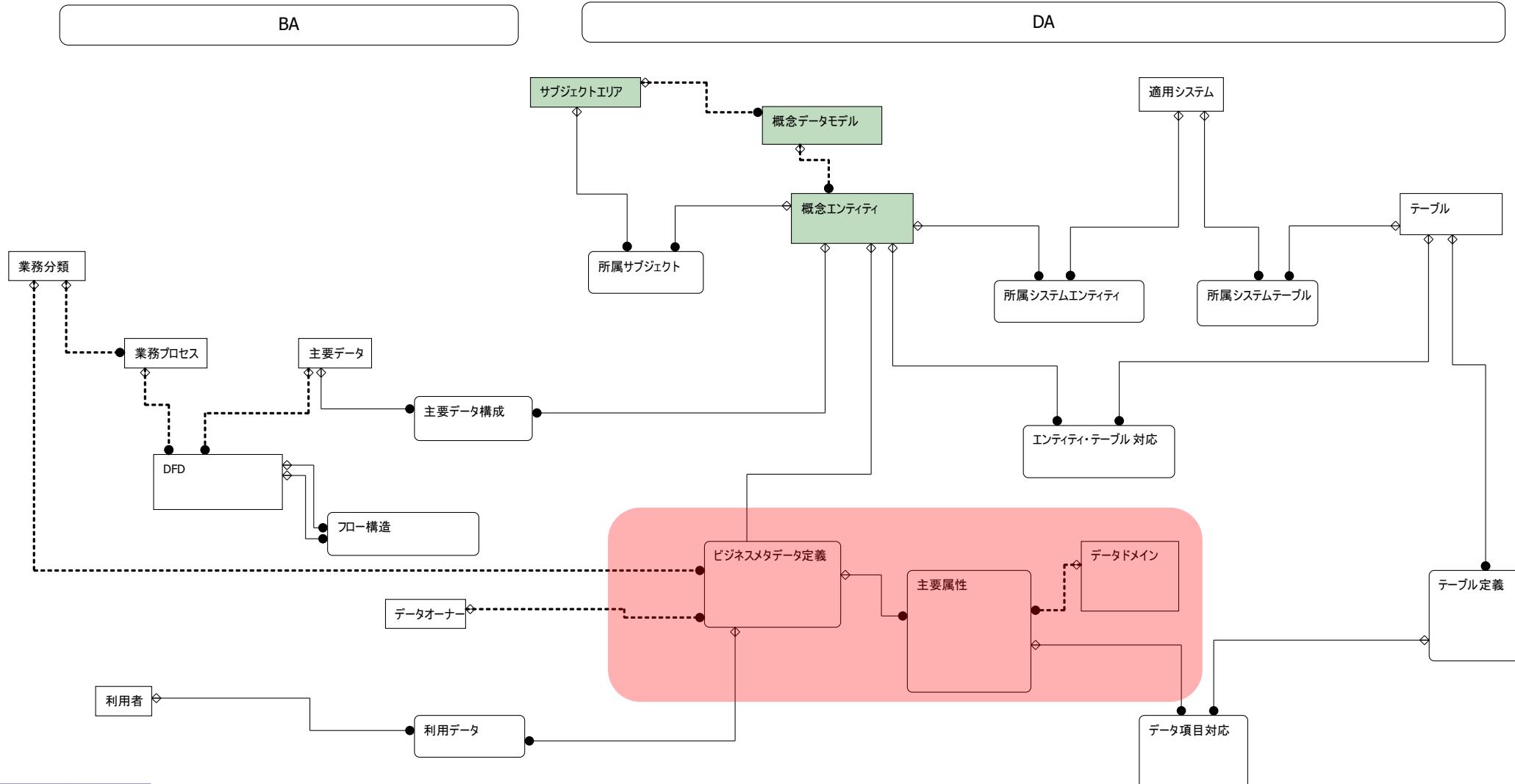
データマネジメントの将来展望

- AIエージェントが自律成長型のデータマネジャーの役割を果たす
- データアーキテクチャは必要条件



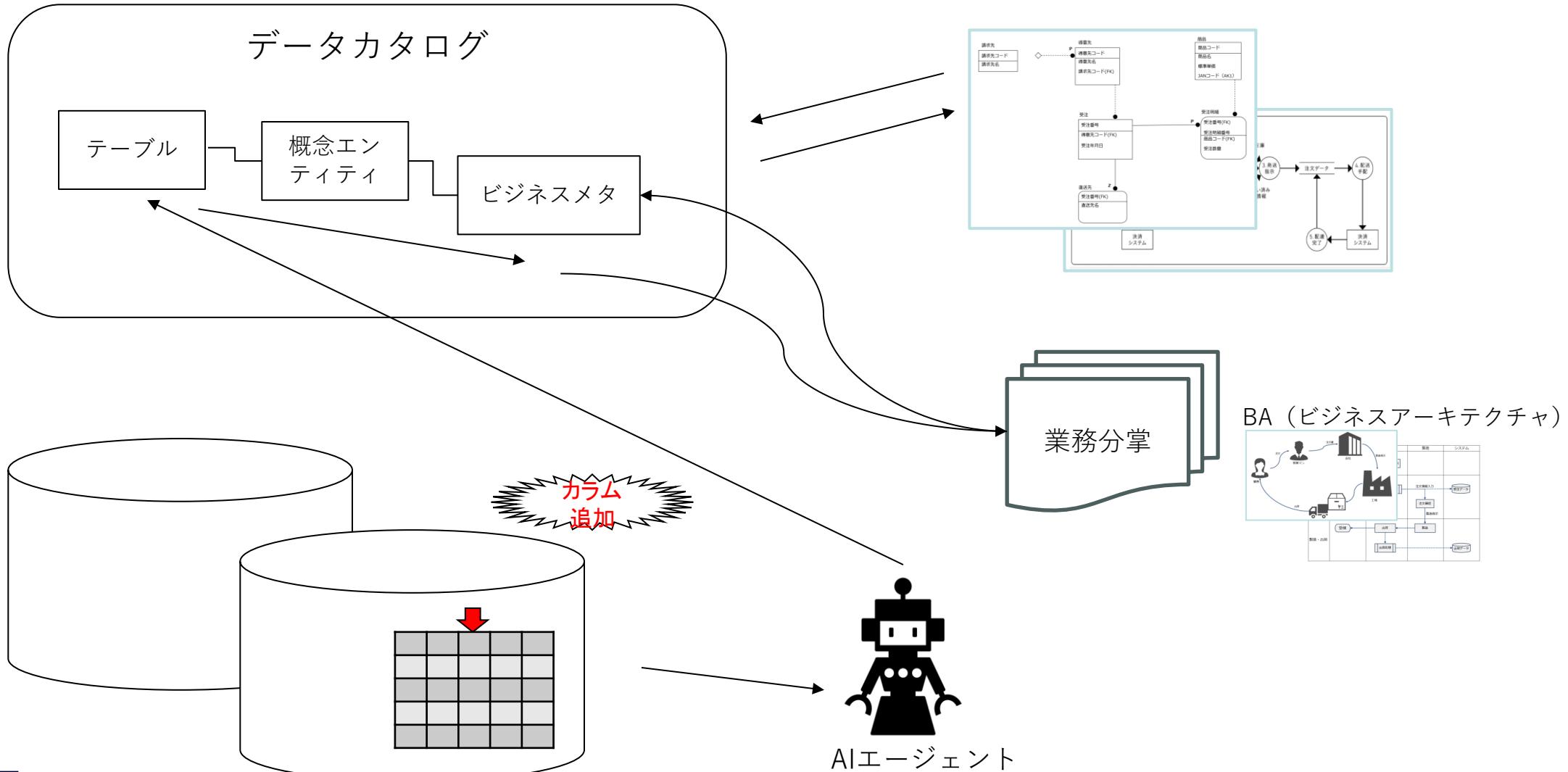
メタデータ整備

- 何をメタデータとして管理するか、関連は？



AIエージェントによるデータカタログの維持

- データの変更時にAIエージェントがデータカタログを更新する

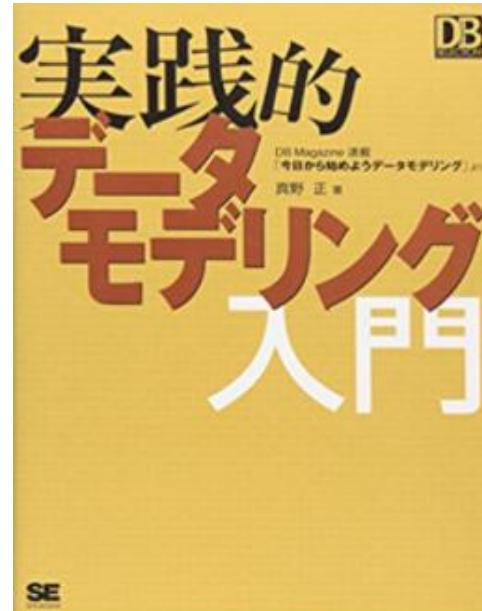


6.まとめ

まとめ

- AIReadyデータ整備のためには、データアーキテクチャの構築が不可欠
 - ◆ そのためのエンタープライズ・データモデリングは必要条件
 - ◆ データモデル、データ系統図、データカタログの整備によりデータ要求に応えられるようになる
- AIエージェントによるデータマネジメント支援が加速する
 - ◆ ビジネスマタデータの集積
 - ◆ データスチュワード、データアーキテクト業務の一部代行
- データモデリングは、AIが担えるか
 - ◆ 部分的なデータモデルの作成は可能
 - ◆ 複数の事業や部門横断が必要なエンタープライズモデリングの作成は無理
- AIReadyデータ整備のために企業のデータ地図を描こう

データモデリングについて学習されたい方へ



- 実践的データモデリング入門（翔泳社）
 - ◆ 2003年刊行（2001年～DBマガジン誌連載）
 - ◆ 2023年2月第23刷 約21,000部販売
 - ◆ 1刷より20年以上経ちましたが、データモデリングの標準的な教科書として多くの皆様にご活用いただいています
 - ◆ IT技術者以外のビジネス（実務、経営）層やDX推進担当の方にも参考にしていただける内容となっています

A thumbnail image for an online course. It features a blue background with a white silhouette of a person standing next to a network of interconnected boxes. To the right of the person, the text "3,316人の受講生" (3,316 students) is displayed. At the bottom, there are language options: "本語" and "日本語".

ビジネス推進のためのデータモデリング入門

DXを推進するためには、現状を把握してビジネス上の課題を発見しデータを活用することが求められますが、その実現手段としてデータモデルの作成が有効です。本講では、「データモデルとは何か」、「データモデルをどう活用するか」という疑問に応えます。

ビジネス推進のためのデータモデリング入門 (Udemy講座)

- ◆ DX推進のためになぜデータモデルが必要か、どのように活用できるのかを解説しています
- ◆ 3,000名様以上のご受講を頂いています
- ◆ 弊社HPにてクーポンを発行しています
<https://dataarch.net/>

ご清聴有難うございました



ご不明点はお気軽にお問い合わせください

お問い合わせ先：mano@dataarch.co.jp